

様申出、其通ゝある可差障候間、後日大夫御使を以、童子共々他國人を恐る言葉習方罷出候者不罷居、尤書籍言葉相教候面々、見合を以申付置候間、佛國言葉習受方隨分可相調、道々右面々相教候様被仰入、關番所と申立通、惣様引除、御藏敷近邊に目立様打調、下人雇方御達被下候と、何様可有之哉、於其許致吟味、御案内上、何分可被申越候、此段致問合候、以上、

附

- 一 關番所と、廿五日より先時宜見計相除させ、關番人減少可申付候、
- 一 通事と、當分此中と通相詰させ、是又廿五日代合可申付候、

六月廿日

嘉手納親雲上

摩文仁親雲上

〔摩文仁親雲上書翰〕

○琉球王聽評
定所日記所載

○六月二十四日嘉手納親雲上宛

琉球書籍言葉教方并佛國言葉習受方、寺門外關番所等儀、神父に致相談、應答成行、且神父申立儀共有之、其元吟味趣被申越、紙面委曲致承達候、
一 佛國言葉儀、十歳比と童子と無之候得と、難習受段申候由、其通ゝある可差障候間、

其元吟味趣意を以、書籍言葉相教、二三日後、神父氣象等見計、大夫御使を以斷相達させ候様、

一 寺内外關番所儀、神父申出通、惣様相除させ、左候、寺門見通と松原に、場所柄見分上、神父不相疑人家と様々關番壹軒作調、圍垣等仕合させ候様、○中略

六月廿四日

摩文仁親雲上

嘉手納親雲上

〔嘉手納親雲上書翰〕

○琉球王聽評
定所日記所載

○六月二十五日摩文仁親雲上宛

一 今日、係伊野波里之子親雲上、通事安慶名通事親雲上、天久寺に罷出、佛人相逢、兼承候通、今日より琉球書籍言葉教方并佛國言葉稽古相始候段、相達候處、通事不引取、關番假屋不引除候付と、此寺に難相住居、宿替可致候間、先教方習方差扣候段申、氣象不宜候付、通事と只と引取、關番假屋引除可申段相達候處、氣象相直、佛國言葉稽古と童子并下人雇一件尋有之候付、下人と人躰見合追被召付筈、童子と事近日中返答有之筈と段申聞候處、いろは文字真と書載置候板行と書物差出、琉球讀と申聞候様相渡候付、一通讀申聞候處、日本と讀方と、此通と申、自分と開合相糺、讀候と申聞、左

候多、猶又漢字ニ相認置候文差出、琉球俗文ニ組調、明日巳ニ時限、可差出旨申候付、請取通事於假屋ニ致披見候處、意味分^マ兼、其上天主教ノ様相見得候付、相斷候方可然^マ与致吟味、則寺ニ持歸、此様意味深文^マと俗文^マニ難申述候間、先當分^マと外^マニ意味淺分安^マのより稽古被相始度段相達候處、尤儀^マ申、官話集置候書物^マニ取替、琉球言葉^マニ引直候様^マニ相渡候付、是又致披見候處、何^マ差障候儀も無之候付、御當地言葉^マニ引直、明日相渡申^マ筈^マと段、係并通事共申出有之候、

一 關番假屋^マ儀、別所^マニ不引移内^マと、當分通付置候方可宜候得共、早^マ不引取候^マと、右通差障候^マ躰相見得候間、明日寺内外共引除、別^マニ作調候間、日中^マと松原^マに、平等役人筑佐事忍詰申付、夜^マと筑佐事一人通事共^マに相付、下遣形^マニ通事詰、假屋^マに相詰させ候様可仕候、外關番敷場^マ儀、いつ^マと立合致見分、寺門東表人家儀相應い^マと候付、明日^マと作始、明後日迄^マ相仕廻させ候様可取計候、尤此中詰通事^マと、早速安慶名安森^マニ代合引取申候、

一通事共^マと、寺三番座^マに相詰候様、去廿日爲申由候處、到今日^マと、一兩日後^マと、外^マ佛國人渡來可相住居候間、通事共^マと、此中^マ詰假屋^マに相住居候様申候由、一下人^マと儀、人躰早^マ相究召付候様可仕候、

右、申越候、以上、

六月廿五日

嘉手納親雲上

摩文仁親雲上

〔嶋袋親雲上書翰〕

○内務省所藏本
琉球王廳評定所日記所載

○七月四日勝連親雲上宛

佛國言葉童子共^マに教方斷^マ儀、神父氣象等見計、大夫差遣候筋、先達^マ致問合置候處、其後通事共^マに、佛國言葉教方有之候由、就^マと童子斷大夫差遣せ候儀^マと、扣居候方可宜^マ申談、致御案内御在番所^マと御相談相濟候間、其通可被相心得候、此旨申越候、以上、

七月四日

嶋袋親雲上

勝連親雲上

○此艦隊ノ長崎渡航ハ、六月七日ノ條ニ見エ、其一艦ノ琉球再渡ハ、七月二十五日ノ條ニ見ユ。

二十五日

己酉

鹿兒島藩主島津齊興、家老調所笑左衛門

廣郷

ヲ老中阿部正

弘

伊勢守
福山藩主

ノ邸ニ遣シ、琉球ノ事態國難ヲ惹起スル虞アルニ依リ、此地

ニ限り貿易ヲ許シ、以テ患害ヲ一島ニ沮メンコトヲ説ク。明日、笑左衛

門、寄合筒井政憲紀伊守○後肥後守ヲ訪ヒ、此事ヲ議ス。

〔鹿兒島藩主島津齊興書翰〕○公爵島津忠重所藏本
島津家國事雜掌史料所載

今般、琉球國へ異國船渡來ニ付、先日御届申上候後、何分不申越候得共、彼地之事情委細申上度儀御座候ニ付、右取扱申付置候、家老調所笑左衛門御退出後差出可申候間、御都合次第御逢被成下候様仕度、此段御内慮相伺候、以上、

午閏五月二十三日

松平大隅守

御書附一通

但、今般琉球へ異國船渡來ニ付、彼地之事情、委細被仰上度儀有之候ニ付、笑左衛門殿可被差出候間、御逢被下候様トノ儀、

御用番

阿部伊勢守様

御用人

山岡衛士

右、御勝手へ持參仕、演說之上差出候處、伊勢守様委細被成御承知、明後廿五日御退出後、

琉球渡來外
鑑ノ事情報
告ノ爲重臣
ヲ阿部閣老
ノ許ニ派ス

正弘會見ヲ
諾シ二十五
日ヲ期ス

笑左衛門殿被差出候様、右衛士ヲ以テ被仰聞候、右之通、今夕私相勤候、此段申上候、以上、

午閏五月廿三日

半田嘉藤次

石(島津久澄)見様

追テ申上候、本文ニ付、御請之儀、如何可仕哉之旨、右御用人へ申述候處、不及其儀旨、同人ヨリ承候、此段モ申上候、以上、

〔鹿兒島藩使者届書〕○島津家國事
雜掌史料所載

○閏五月二十五日藩廳宛

御用番

阿部伊勢守様

右ハ、今般琉球國へ異國船渡來ニ付、彼地之事情被仰上度、依之笑左衛門殿御逢之儀、一昨夕被仰込候處、御即答ニ、今日御退

城後、御越有之候様、御用人山岡衛士ヲ以テ被仰聞、其段申上、御參上ニ付、私致同伴御勝手へ罷通、右衛士へ出會、初テ御參上ニ付、御太刀馬代御進上候段、私ヨリ申述、御品笑左

弘化三年閏五月二十五日

七五三

弘化三年閏五月二十五日

七五四

衛門殿ヨリ御渡被成候之處、伊勢守様へ可被申上候間、御扣被成候様申聞、御扣所へ致御案内被成御扣候處、御退出之上、左候テ御逢之席へ御通候様御案内有之、御逢之席次之間へ、御扣被成候處、無程御出座、直ニ御進ミ、御内用筋爲被仰上由ニ御座候、右被爲濟、御披被成候、左候而御門前ヨリ御立歸リニテ御逢之御禮、右衛士へ被仰述候、

右之通、今日伊勢守様御逢無御滯相濟申候、御同伴私相勤候ニ付、此段申上候、以上、

午閏五月廿五日

半田嘉藤次

將(中山久徳)曹様

追而申上候、本文之通、御逢相濟候趣、

太守様ヨリ御挨拶之御使ヲ以テ、後刻大迫源七相勤申筈御座候間、彼方ヨリ首尾可申上候、此段モ申上候、以上、

調所笑左衛門

右者、今日阿部伊勢守様御退出後罷出候様、去ル廿三日被仰達置候ニ付、半田嘉藤次同伴御勝手へ罷出、相扣居候處、與於御書院御逢被成候ニ付、

廣郷琉球外
警渡來ノ事
情ヲ阿部閣
老ニ陳ジ手
書ヲ提出ス

(島津善典)太守様ヨリノ御口上ニテ、琉球國兼而之事情且一昨年ヨリ佛朗西船渡來三ヶ條之難題申

掛候趣、又當四月ヨリ五月ニ至リ、大總兵船都合三艘渡來旁之成行細々申上候處、誠ニ不容易御難題御到來、右者琉球而已ニ限り候事ニテモ無之、別而不輕譯柄、細々御聞届、一々御尤ニ思召候、猶篤ト御勘考、御勘辨被成候而、追而私御呼出、御返答可被仰進トノ御事ニ候、左候而、右者品々入組タル事候付、手扣書ハ無之哉ト御尋ニ付、全ク私心覺之爲メ、御口上之大意、頭迄認置候趣申上候處、左候ハ、夫ヲ差上候様ニトノ御事故、別紙通差上、且極々御内意御役場ヲ御離レ、御聞被下候様ニトノ儀モ被申上候處、夫モ手扣有之候ハ、差上候様被仰聞候ニ付、極々御内意、御別紙共ニ通、御直ニ伊勢守様へ差上置候段、罷歸、
太守様

(島津善典)少將様へ御直ニ申上候事、

但、伊勢守様初而御逢被下候ニ付、笑左衛門立歸リ、又々御勝手へ罷出、公用人山岡衛士へ面會御禮申上候事、

太守様ヨリ笑左衛門へ御逢被下候御挨拶、大迫源七御使者ヲ以テ被仰進候事、

午閏五月廿五日

大迫源七

弘化三年閏五月二十五日

七五五

弘化三年閏五月二十五日

將 (坂山久徳)
曹 様

七五六

〔鹿兒島藩使者口上控書〕

○島津家國事
雜學史料所載

○閏五月二十五日

御口上

手 扣

一昨年、琉球國へ佛朗西國之船來着、和好交易天主教之儀申掛候ニ付、琉人共ヨリ程能爲申斷候得共、乗組之内兩人殘シ置、追而大總兵船可渡來旨申置、本船ハ致出帆、其後兩人之者共ヨリ、追々通商等之儀申掛候得共、一途ニ相斷、未タ兩人ハ致逗留居候、然ハ西土之儀近來段々船乗之道開ケ立、諸方未審之地迄モ致渡海、交易又ハ商館等取建候向ニ御座候由、然處琉球ハ東洋へノ海路ニテ通船之湊ニ致シ候得者、至極辨利之所ト申事之由御座候ニ付、近年ハ嘆咭喇國并亞墨利加等之船々、沖合へ致汐掛候儀多ク有之由ニ相聞得申候、則天保十五辰十月十日琉球之屬島八重山嶋へ嘆咭喇國之船一艘來着、日々致測量等、土地之者共へ至極叮嚀ヲ盡シ、同十一月廿九日出帆、同十二月朔日宮古島へモ渡來、右同様致測量、土地之者へモ、是又叮嚀ヲ盡シ、同十六日致出帆候趣者、追々御届申上置通ニ候、然處當四月五日琉球國那霸川口へ、嘆咭喇國船二拾人乗一艘來着、醫師伯徳壹人右之妻一人

近年外國船
ノ出沒スル
モノ特ニ多
シ

本年四月五
日英國船來
リ醫師妻子
ヲ殘留シテ
去ル

同七日佛艦
一隻來ル

五月十三日
運天沖ニ佛
船三隻見ユ

佛人必ズ和
好交易布教
ノ三ヶ條ヲ
要求セン
琉球ノ國情

男女子共二人唐人一人、致逗留度申出候ニ付、當國ハ右様之儀不相成國法ニ付、斷之段申聞候處、左候ハ、地面買取度趣、是又申出候得共、右同様相斷候得者、本國皇帝之命ヲ受差越候ニ付、是非致逗留候段申聞、無躰ニ諸道具等持卸シ、本船ハ同八日致出帆、無據時宜合ニ付、近邊之寺明ケ渡シ、右へ差置候由、同七日ニハ又々佛朗西國之船三百人乗一艘來着ニテ、跡ヨリ大總兵船五百人乗一艘三百人乗一艘渡來之筈候間、夫迄滯船致シ候趣モ申出候由ニ付、右之趣飛船ヲ以テ早々注進申越候處、不順ニテ出帆難成、琉球之内諸所へ致汐掛、五月十三日午漸致出帆、十里計モ乗出候處、異國船二艘琉球運天の方へ向ケ乘來、右ハ佛朗西船ト見掛候趣、飛船之船頭申出、其段モ粗申上置候、未タ琉球ヨリハ何分之儀不申越候ニ付、今ニモ注進可有之ト相待居候事ニ御座候、右船々來着之上ハ、定テ一昨年申置候三ヶ條之返答可承ト申出候儀ハ、相違モ有之間敷哉ト被察申候、然ハ琉球之儀ハ南海之孤島、誠之小國ニテ金銀銅鐵之類ハ毛頭無之、水少ナノ土地、五穀ハ天水ニテ致生熟候國柄、產物迎モ黑砂糖之外、格別之品モ無之、殊ニ文國ニテ武器之備ハ全ク無之、往古ヨリ和漢通商ヲ以テ立行來候國柄、抑嘉吉年間ヨリ領分ニ被下置難有、今以テ領地之事ニ御座候、然共中山王代替ニハ、清國ヨリ封王使差渡、封爵ヲ請ケ、朝貢致シ來候國ニ御座候得者、國許ヨリ差渡置候在番奉行其外役々、清國之者共へ面ヲ合候事ハ、遠慮致シ候往古ヨ

弘化三年閏五月二十五日

七五七

佛人ト應接
ノ次第ニ由
リテハ日本
ノ國難起ラ
ン

弘化三年閏五月二十五日

七五八

リノ仕來ニ御座候、乍然内實ハ、清國ハ素ヨリ、嘆咭喇國・佛朗西其外外國之者共、琉球ハ日本へ致通商候儀、飽迄案内之事ト相聞得候ニ付、佛朗西ヨリ三ヶ條之難題申掛候儀歟ト被察申候、依テ右三ヶ條之儀、國禁之趣ヲ以テ強テ相斷候者、若シ清國等へ引合、彼國ヨリ琉球ト交易之儀免許之儀共取企、自儘之儀共取計候時ハ、其儘ニハ難捨置、何レ事ヲ破候外ハ無御座、然ル時ハ勝敗之有無ニ不拘、琉球國ヨリ事起リ、日本之御邪魔トモ致到來候テハ、誠ニ無申譯次第、何レ無事平穩之取計不仕候テハ、不相叶儀ニ御座候、就テハ此餘之儀ハ、書面ニテ難申上御座候間、乍御面倒差出候家來ヨリ、委曲御聞届被下候様仕度事、

閏五月

〔鹿兒島藩使者口上書〕

○島津家國事
執筆史料所載

○閏五月二十五日

極御内々申上候、抑琉球之儀ハ、嘉吉年間ヨリ領分ニ被下置、是迄薩州手限ニテ何事モ取治メ爲申事候得共、此度迎モ奉訴候様之儀ハ不仕所存ニ御座候得共、一昨年佛朗西船來着、和好交易天主教之三ヶ條難題申掛候儀ハ、御届申上置候通ニ御座候、其節殘置候佛朗西人共ヨリ、折節右三ヶ條之儀申出候得共、其時々攝政三司官トモヨリ斷申置候趣ニ御座候、左候而、此度渡來之佛朗西人共之様子ヲ承候處、來着早々上陸、馬上ニテ琉球之内諸所、恣

琉球ニ於ケ
ル佛人難題
ヲ提出ス

佛人容易ニ
我意ニ從ハ
ザルヲ以テ
交易ノミヲ
限リ之ヲ許
サン

ニ致横行候趣ニ御座候得者、定而一昨年同様難題申出候半ト推察仕候、就テハ唐・阿蘭陀外、外國通商之儀、堅御禁制之段者、深承知仕罷在候得共、右様難題申掛候ニ付テハ、是迄之通理解而已ニテ申斷候テモ、迎モ承引仕候儀ニテハ有之間敷、依テ交易之道ニテモ少々究候様御座候ハ、琉球ハ外藩之儀ニモ御座候間、琉球限リノ取組ニイタシ、地方へハ右船々渡來不致様爲仕度、乍然未タ應對モ不仕事ニ候得者、何分之儀ニ可有之哉難計候得共、精々中山王初攝政三司官共無事平穩之取計仕候様、早々申越候様仕度、右ハ書面等ニテ表向奉伺兼候ニ付、極御内々御内慮別段相窺候事、

閏五月

〔鹿兒島藩江戶詰家老内用狀〕

○島津家國事
執筆史料所載

御用番

阿部伊勢(正)守様

右ハ、今般琉球へ異國船渡來付、彼地之事情委細被仰上度候付、拙者儀御逢被下候様別紙御案文之通、前以テ御内慮被相伺候處、去ル廿五日參上候様トノ御事候付、致參上、御退出後被成御逢候付、別紙御手扣書差出、御覽之上、尙又口達ヲ以事情細々申上置候、且又一昨廿六日ニハ、筒井紀伊守殿(政憲)へモ差越、同斷御手扣書差出、細事申述置候、イツレ追テ御挨拶

弘化三年閏五月二十五日

七五九

廣郷筒井政
憲ヲ訪フ

弘化三年閏五月二十七日

七六〇

ハ可有之哉ト存候、爲御心得、此段極御内用ヲ以申越候、以上、
午閏五月廿八日

調所笑左衛門

島津豊後殿
島津壹岐殿

本文致承知、阿部様並筒井殿方へ御自分被差出、琉球之事情委細被仰込候由、彼是御配慮
之儀ニ存候、別紙扣置、此旨及御返答候、以上、

午六月廿六日

二十七日亥 米國東印度艦隊司令長官海軍代將「ジェームス・ビッドル」
Commodore James Biddle 軍艦「コロンバス」Columbus・「ヴァインセンズ」
Vincennes ヲ率キテ浦賀ニ來リ、書ヲ奉行大久保忠豊因幡守ニ致シテ通信
互市ヲ求ム。

〔浦賀奉行届書〕

○外務省所蔵本
續通信全覽所載

○閏五月二十七日幕府へ

米艦浦賀ニ
來航ス

(深表) 異國船浦賀近く相見候儀、申上候書付、大久保因幡守(忠豐) 信全覽
異國船儀ニ付申上候書付、大久保因幡守(通航) 實録載

今廿七日巳中刻、異國船沖合へ相見候段、三崎詰與力より注進申越、其後追々注進付、爲
見届、組與力同心通詞爲乗組、六番船迄差出申候處、異國船二艘多、追々浦賀表へ艇寄候
ニ付、御固筋嚴重申付、私人數召連、平根山御臺場へ相詰罷在候、此上地方へ近寄候ハ、
湊内へ引入繫止、通辯上、相糺取計方相伺可申候、依之此段先御届申上候、以上、

閏五月廿七日

大久保因幡守

(弘化雜記、開見録)
通航一覽續輯)

(卷五) 異國船二艘野比濱沖へ掛留候儀申上候書付、大久保因幡守(通通信全覽)
先刻申上置候異國船二艘多、追々艇寄野比濱沖ニ掛留候處、一艘凡二千石積位、一
艘凡千五六百石積位相見え、何モアメリカ船相違有之間敷旨、組與力同心共申
聞候、通詞堀達之助爲乗組、通辯中ニ御座候へ共、逆意無之様子相見え、人數兩艘多
凡七八百人程乗組、大筒武器類多分積入罷在候趣御座候段、組者共通詞申聞候、
猶通辯分り次第可申上候へ共、先此段申上候、以上、

弘化三年閏五月二十七日

七六一

弘化三年閏五月二十七日

閏五月廿七日

七六二

大久保因幡守

(通航一覽續輯、
弘化雜記、聞見錄)

(卷表)
異國船に儀し付、申上候書付、大久保因幡守 ○續通
信全覽

弘化三丙午閏五月廿七日、浦賀奉行方御届書に寫、○弘化
雜記

異國船、閏五月廿七日、辰上廻、渡來、松ヶ崎に掛り居候旨、浦賀奉行大久保因幡守より二度目注進狀寫、○浦賀
雜記

異國船に儀し付申上候書付、大久保因幡守 ○通航一
覽續輯

六月八日、天屬晴、炎暑 ○中 今日和書局出仕所鶴峰戊申云、是浦賀奉行御届書也云々、尤眞書也、依寫之畢、○松守
日記

先刻申上置候異國船、猶又組し者通詞差遣、船中し様子國元等爲相糺候處、北亞米利加州に内、ハチトン船ふる大小二艘に内、小船に方元船支配船に由、凡元船長サ四拾貳間半、幅九間貳分、深六間八分、大筒八拾三挺、左右三段に仕掛、小筒八百挺、短筒八百挺所持罷在、船主ビツデレと申、人數八百人乗組、小船に方長貳拾貳間、幅五間九分五厘、深四間四分貳厘、大筒貳拾四挺、左右一頼ふ備有之、貳百人乗組罷在、去巳四月國許出帆に由し付、子細相尋候處、全商賣筋に儀し付、願し趣有之罷來候由、逆心を無之様見受候段、前文に者共罷歸申聞候へ共、多人數乗組罷在、大筒數多積込外武器類不相見由し候へ共、

右鐵砲類取揚可申處、如何ふも嚴重に備方し付、容易し差出申間敷奉存候、強ふ申渡候に、及爭論候も難計候し付、先野比濱沖へ貳艘共爲掛止、番船嚴重に附置申候、薪水に任願、相應ふ相與、外願し趣書面差出候へ共、亞米利加語に急し和解難取調旨、通詞申聞候、尙相糺候上、取計方相伺可申候へ共、願し趣意并船形等相糺候間、不取敢此段申上候、以上、

閏五月廿七日

大久保因幡守

(弘化雜記、涕泣輯書、聞見錄、
通航一覽續輯、松守日記)

〔浦賀奉行伺書〕

○續通信
全覽所載

○閏五月二十七日

(卷表)
異國船に儀し付、奉候候書付、大久保因幡守

先刻申上候亞米利加人より差出候願面、通詞堀達之助へ和解申付、出來仕候間、願書并達之助差出候書面共入御覽申候、右和解し趣し多し、文政元寅年五月内藤外記勤役中、イキリス人渡來、通商に儀願候節、別紙寫し通申渡、歸帆爲仕候書留相見候間、右し趣し取計候様可仕候哉、且又望候品も御座候趣し付、食料薪水も外、御國禁し無之品も相應し相與へ、早速歸帆仕候様可申渡と奉存候、此段奉伺候、以上、

弘化三年閏五月二十七日

七六三

米國人差出
ノ願書ヲ解
ス

弘化三年閏五月二十七日

七六四

閏五月廿七日

大久保因幡守

別紙

イギリス人へ申渡書寫

此度、其方儀我國と交易いたし度趣申聞候へ共、抑我國をいそれある國の外、新し通信通商を議せる事々、昔より堅き禁として、許す事なきや故に、歸帆いたせへし、ヲロシヤよりも先年度々願されともゆるさず、其國とても同様と儀なきは、此後幾度來りて願ふとも無益の事をせと、再び來る事なかれ、

〔浦賀奉行届書〕

○維新史料編纂會所蔵本
浦賀奉行所蔵

一 弘化三丙午年閏五月廿七日、相州浦賀湊より二里程外、野比濱に申處に、同日辰に剋頃、異國船貳艘致船繫候に付、浦賀御役所より追々注進有之、四度目に注進、廿八日辰剋致着、退剋進達に相成候よし、

御老中

阿部伊勢守殿に異國船と儀に付、申上候書付、

浦賀奉行

大久保因幡守

先剋申上候異國船、猶又組と者通詞差遣、

○以下前掲ト同
文意に付省略ス、

〔浦賀奉行届書〕

○内閣記録課所蔵本
通航一覽續編所蔵

○閏五月二十七日老中へ

昨廿六日浦賀表に入津仕候廻船と名のより、異國船二艘見請候風聞に付、御番所詰組與力承紮候趣、以書取申出候間、(下ニテテ被ク)則寫相添、此段御届申上候、尤御備場と儀を、無油斷心付候様申渡候、以上、

閏五月廿七日

大久保因幡守

〔別紙〕

尾張國中洲直乘兵左衛門船水主九人乗、右船於國元米積立走り下候處、當月廿三日晝九ツ時頃、遠州新居沖合地方より凡七里と場にて右船より壹里計隔、異國船壹艘見掛候處大船にて凡千五六百石積位にも可有之哉、船物躰昨年來候船の通相見、櫓三本帆九ツ并遣り出し帆等建、南風にて東と方に向走、翌廿四日夕刻まで遠州横須賀沖よりも相見へ申候處、其後と帆影も一向相見不申候、尤船中人數且人物様子等を見極不申候、右と通、船頭兵左衛門申立候、

一 三河國高濱直乘助八船水主七人乗、右船於國元町人米酒浦賀揚酒其外拾ひ荷物積立、走

弘化三年閏五月二十七日

七六五

黒船ノ大サ
凡千五六百
石積

船頭兵左衛
門、八助ヨ
リ各申立書
ヲ徵ス

り下り候處、當月廿三日晝頃、遠州新居沖合凡地方より拾里と場にて、右船より八九町隔、異國船壹艘見掛候處、何千石積位候哉、相知不申候得共、大船にて檣三本遣り出帆等建船物躰黒く、中頃より下と方に白く、南風よて右船同様走、翌廿四日夕刻まで、同州横須賀沖よりも相見候處、其後帆影も相見不申候、尤船中人數且人物と様子等見極不申候、

右と通、船頭助八申立候、此段御届申上候、以上、

午閏五月廿七日

中島三郎助

近藤良次

(弘化雜記
聞見錄)

〔通航一覽續輯〕

○内閣記録
課所屬本

閏五月廿八日、相模國三浦郡に屬す、浦賀浦賀湊に近づき、野比村沖に繫留す、奉行因幡守通辯をもて尋問せしむるに、北亞墨利加洲パチトンの軍艦にて、通商を願ふよし、横文字を出すより、和解ならひは船中の武器乗組の員數を言上す、

弘化三年閏五月廿七日〔朱卷〕「奉行御用狀」

以急御用狀得御意候、然と追々申進候異國船、二艘よて艇寄候間、先野比濱沖合に掛留、

一通糺候趣申上書、取調差進候、御一覽と上、御進達と儀、宜御取計可被成候、委細と右紙面よて御承知可被成候、

右と趣得御意候、以上、

閏五月廿七日

未中刻出

一柳一太郎様

大久保因幡守

〔米國艦隊司令官書翰〕

○續通信
全覽所載

○浦賀奉行宛

丙午閏五月廿七日

アメリカカ船より通詞宛より差出候横文和解、

アメリカカを、支那と通商と信義を結ひ、彼邦と數月滯船致し、今本國へ可歸と處、態と御當地へ渡來仕候、其次第を、支那同様御當地於ても交易と道を開願とん爲と御座候、若御免と御沙汰を蒙り候ハ、日本通商と儀を、御國法通相守可申、我政府よ於ても、奉差上候本文と趣意通り、通信致し度存念と御座候、

千八百四十六年第七月

(異船渡來一件、通航一覽續輯)
弘化雜記

ユムリユムヒユス船號

弘化三年閏五月二十七日

七六七

米國通商ヲ
要求ス

弘化三年閏五月二十七日

ヒツケンゼームス

七六八

〔同前異譯〕

○補通信
全會所載

此度、政司共々心願を奉申上候爲、私儀 御當地へ罷越候、一應口上より御願申上候通、猶又書面より認奉差上候、
アメリカ國を、支那と通商の信儀を結び、數月彼邦より致逗留シ、今本國へ可歸之處、態々 御當地へ渡來仕候、其次第に
支那同様 御當地よりおゐて交易の道を開願仕候儀、御座候、若御免に御沙汰を蒙り候と、御當國通商の儀を御國法
通ふ相守可申上候、政司も於ても奉差上候和交の趣意、通信いたし度存念に御座候、

曆數千八百四拾六年

六月二十二日

船號 ユリユムピエス、ビツデレ

〔米國水師提督ビツドル書翰〕

○公爵島津忠重所藏本
島津家國事雜學史料所載

○閏五月二十七日幕府宛

私共、御當地へ參候次第、御尋ノタメ御役所ヨリ御役人御出被成候ニ付、口上ヲ以御答申
上候處、此度渡來ノ趣意、書面ニ認指上候様被仰渡、奉畏候、私儀、亞墨里加ヨリ支那ニ罷
越シ、亞墨里加ト支那トノ交易取結仕候ニ付、數月彼地ニ逗留仕、歸路御當地へ罷出候外、
野心無御座候、日本ニ於テモ、支那ノ如ク、外國交易御免御座候哉、且又亞墨里加船、兼テ
相望候通り、通商出來候哉否、駈ト承知仕度存候テ罷越候儀御座候、私儀ハ、此一件取計ノ
義ニ付、本國ニテ掛リノ役被申付候事ニテ、存意ノ儀ハ、日本語ニ翻譯仕候上、書中ニ相認

米國提督幕
府へ通商ヲ
請フ

有之候、以上、

壹千八百四拾六年七月貳拾日

即弘化參年閏五月貳拾七日ニ丁ル

江戸ノ湊ニヲヒテ

コロンピユス船主

ヤメス、ビドン

〔聞見録〕

○維新史料編
纂會所藏本

此度渡來異國船願書、左に通、

横文字を解

アメリカハ支那より通音の信義ヲ結ひ、彼邦に數月滯船し多し候、今本國に可歸の所、御
當地に態々渡來仕候、其次第に、支那同様ニ於御當地ニ交易の道を開願せん事ニ御座
候、若御免に御沙汰ヲ蒙らハ、日本通商を御國法に通り相守可申、我政司におひても奉
差上候和文の趣意、通信い多し度存念に御座候、

閏五月廿八日

異國人に諭書

弘化三年閏五月二十七日

七六九

此度、我國と交易いゝし度旨、願ふといへとも、我國新ニ外國と通信通商ヲゆるさば、事、堅き國禁として、ゆるさざる事なるゆへ、早く歸帆いゝば、先年より度々通商被願ふ國ともあれとゆるさば、其國として同様に事をなれ、此後幾度さあり願ふとも無益に事、勿論外國に事を長崎にありあつたふ國法にあり、此地も外國に事ありあつたふ所にあらば、されハ願ひ申旨ありとも、よき來りて事通せざる間、再ひよき來る事なけれ、

浦賀奉行に相達候趣

異國船渡來に儀に付、別番横文字并和解且又イギリス人に申渡寫等相添、委細被申越候趣、令承知候、則別紙書取ヲ以相達候間、其通相心得、尤異國人共へに諭書案一通差越候間、得其意歸帆候様可被取計候、以上、

六月二日

連名

浦賀奉行貳人に

此度渡來候異國船、武器に類可取上所、差出不申候由に付、右船湊内に不引入候事差置候事、

一食料薪水等に儀、則別紙に通被申越候得共、此度渡來に船を、漂流船とも違、彼方事を設、

渡來いゝし候義故、食料薪水とも相與へ候筋に有之間敷候へ共、最早彼に望み品相尋、品書等差出候上と、悉皆不相成候とも難申渡、依之薪水に所と、望に任せ相渡可申、食料其外に所、相渡候義無用に可致候、乍併歸帆にも及候程にあり、彼より達を相願候ハ、事實無據事故、伺書に内掛紙に外、伺に通差遣可申候事、
右に通、浦賀奉行伺書に及差圖候事、

〔米國大統領國書〕

○櫻葉紀
事所載

○弘化二年三月十日

亞米利加人差出候日本語

亞米利加合同國之大公之名保間小願萬福、放明於合同國知照に者、大公欽派エバレテ當亞米利加合同國之勅使ニナツテ、中國へ到、此大官誠聰明候に、大公思愛に合同國之法度權勢ヲア□、其日本國之權勢有大官憲等、拜々相□相分勘辨、定テ海上渡通商之約束兩國大切之事、治テ御朱印スル、其以後合同國之勅使、自身照シテ、本國之貴官憲等相□ユへ、免許有、合同國之朱印シ、證據へ京都ワシントンヤニテ、ケツパンスル、

救世主耶蘇降世後一千八百四十五年四月十六日

正是亞米利加合同國攝自主之權六十九年

弘化三年閏五月二十七日

弘化三年閏五月二十七日

七七二

即弘化二年乙巳三月十日

大 公 親筆

宰 相 親筆

且於乙巳年四月内

勅使エバレテ本國之師船ヨリ中華日本等國へ不渡、タ、シ海上之病氣ニアヤウシ□、此公使之事別之官憲ニ渡シ候自身本國へ廻ナリ、他代我故是西國之風俗ニ何幾時ニモ何□ニ相思愛□□、此勅使エバレテ未回ヌ時、水師統領官□ドルヲ定テ、中國日本等國通商之大官トナス、

〔續通信全覽〕

○外務省所藏本

○弘化三年閏五月

今度渡來異國船承札、

一去巳年四月六日、本國北亞墨利加州ワシントン出船、同十二月廿九日、清國廣東ふ著船、同所滯泊、當午四月三日、廣東出帆、乍浦・厦門・芝丕等へ廻船、夫より御當地へ相越候、一直は本國へ歸帆可致し處、我本國より清國へ渡海、必日本海を経候ふ付、既ふ清國と通信交易し條約結盟相成居候儀ふ有之候間、其中間ふ在之御國へ付、清國へ例へ任せ、通

信交易を被開候を以て、相互は國益を基、我政府は於るも懇望せる所は付、右請願し船を寄せ候儀ふ有、其他別義を無之候、

大 船

ユムリユムヒユス 號船

將 官

ヒツケンゼームス 年六十

副 將

イソクタムスウ 年三十

小 船

ウリンセンス 號船

將 官

ポーンハイレム 年四十六

副 將

フケンセスチャアレス 年三十一

一 大 船

弘化三年閏五月二十七日

七七三

乗組總人數八百人
 大砲 八十三挺
 小筒 八百挺
 短筒 八百挺
 船大サ長四拾貳間半、幅九間貳分、深六間八分
 一小 船

乗組總人數貳百人
 大砲 貳拾四挺
 小筒 貳百挺

船大サ長貳拾貳間半、幅五間半九厘、深四間四分四厘

一大 船

舩 大小九艘

一小 船

舩 大小五艘

〔浦賀附通詞ヨリ聞書〕

○維新史料編纂會所藏本
異船遊來一件所載

浦賀譯官森山某ヨリ承リ書留ノ傳寫

軍艦二隻

北亞墨利加バシトン

「子ウヨルク」仕立類船ナシ

本國已四月晦日出帆、廣東に、十一月二十九日著、午四月三日廣東ヲ發シ、「ニンホ」三十一日滞留、夫ヨリ閏五月二十七日相州浦賀湊に著、

「アメリカ」曆ニテハ、六月四日アメリカ出船、二月五日廣東に著スト云、

大艦 船名 コロンヒユス

長四十二間半 幅九間二分 深サ六間八分

石火矢八十八挺 哨船五

檣二百フート 表二百フート 艦百七十フート

小艦 船名 ウイシセンス

檣百五十二フート 表百四十二フート 艦百三十六フート

大船將名ヒツテレ 小船將名ホフレ 船主名「エームス」ロベテイル

此處乗組諸役人數認有之候得共、略ス

大艦將名「ミニステル」、御老、中位、此者廣東へ參居候處、病氣故、此船將ヒツテレ、若年、代リ

弘化三年閏五月二十七日

參ル、副將名ワイマル、士官名ターマル、
右、「フート」ハ日本ノ一尺餘ニアタルト云、

右、坤輿圖識ヲ閱ルニ、「予ウヨルク」國ハ北アメリカノ南部ニテ、我享保十九年
エキリス人此部ニ人ヲ種シ所也、
以上譯官ヨリ送リタル書ナリ、

○是ヨリ先、北米合衆國政府ハ、南京條約締結ノ結果トシテ清米通商條約ヲ調印シ、
對日交渉ノ必要亦起レリ。因リテ同國政府ハ、「エヴェレット」ヲ駐清公使ニ任ジ、命ズ
ルニ日本國トノ通信互市ニ當ルベキヲ以テセシガ、途次「エヴェレット」、病ミテ本國
ニ歸還ス。即チ「ピッドル」代行シテ、是月十四日、舟山列島ヲ出發シ、江戸灣口ニ向ヘ
リ。

○幕府ノ浦賀警備ヲ嚴ニスルコトハ、六月二日ニ、米艦ニ諭書ヲ授ケテ其請ヲ斥クル
コトハ、六月五日ノ條ニ見ユ。

二十八日子壬 學習所後學ヲ京都建春門前ニ建設ス。

〔土御門晴雄上申書〕○孝明天
皇紀所載

○二月朔日廣橋光成へ

開明門院御舊地ニ被建學習所、自昨年御造營取懸ニ付、方忌等之事御尋承存候、自昨巳年
到明未年、東方大將軍方之禁忌、嚴重ニ候得共、被遷皇居候ト申様成儀ニテモ不被爲在、又
禁中トハ御別邸ニテモ候、其上被建學習所、群臣忠孝之道ヲ學問セヨト之叡慮ト恐察仕候、
忠孝ヲ學ヒ候御場所ヲ被建候ニ、禁忌嚴重ノ大將軍モ、ヨモヤ御祟有ヘクトモ不被存候、
併、御茶屋ナト御慰所ヲ被造作候ト申様成儀ニ候ハ、大將軍方ハ御宜敷有間敷存候得共、
被建學習所候ニ、御子細少モ有間敷存候、乍去、此度被建候學習所之オモタチ候御殿、立柱
以前ニ御手輕地鎮祭歟、又御造作御出來之上、清祓ニテモ被仰付候ハ、猶更御宜可被爲
在ト存候、若年晴雄萬事未熟、甚以恐入候得共、御尋ニ從ヒ、愚存之儘申上候、猶又宜相願
存候事、

二月一日

晴 雄

廣橋大納言殿(光成)

〔御用帳〕○德大寺實堅武家傳奏記錄
東京帝國大學所藏本

○閏五月二十六日

見返へ 明(大隅守茂正)
樂

弘化三年閏五月二十八日

七七七

弘化三年閏五月二十八日

七七八

學習所出來ニ付、出來榮見分(斯院、京都町奉行)儀、伊奈遠江守(忠義、所司)に被仰付候段、酒井若狹守相達候付、來ル廿八日辰半剋揃(良廣、京都町奉行)ニ有見分仕、存寄無之候ハ、即剋私共(忠義、所司)に可引渡旨、田村伊豫守申聞候付、先日伺濟(忠義、所司)ニ通、即日御兩卿其外及御見上、御用掛り取次、學習所雜掌に御預儀可申渡奉存候付、別紙手續書順書共貳通進達仕候、

一學習所土藏壁乾兼候處(忠義、所司)ニ塗上難相成候間、乾次第追(忠義、所司)テ塗上候積、且見隱植物(忠義、所司)ニ儀、此節植置候得(忠義、所司)テ、土用芽出宜積申上置候處、猶相糺候得(忠義、所司)テ、暑氣(忠義、所司)ニ時分ニ付、植付候(忠義、所司)ハ生立(忠義、所司)ニ程難覺束趣(忠義、所司)ニ付、先此節場所見計、四五本程爲植付、時節相考、悉爲植付、追テ右(忠義、所司)ニ向出來(忠義、所司)ニ節(忠義、所司)テ、小堀勝太郎以下見分爲仕、爲引渡候積、伊豫守申聞候付、此段申上候事、

閏五月二十六日

學習所及御見手續書

廿八日巳剋迄(忠義、所司)ニ、御兩卿、學習所傳 奏衆・學頭并奉行衆共御所に御揃御待合、私共(忠義、所司)に請取候ハ、即剋御用掛り取次ヲ以、御案内申上次第、學習所に御越及御見積、

一御兩卿方其外御一同、學習所に御出有之候得(忠義、所司)テ、私共組御取締懸與力、玄關(忠義、所司)方御休所に御案内申、御著座(明榮茂正、雜掌附)、大隅守、次(忠義、所司)に間に罷出、御挨拶申上、夫方御取締懸り同心御先立仕、與

力御案内申、大隅守、取次、御賄頭勘使修理職學習所雜掌等御附添申、順書(忠義、所司)ニ通、及御見相濟、御休所に御著座、大隅守方御用掛り取次并雜掌に御預儀、可申渡候間、御勝手ニ御退出有之候様申上、大隅守(忠義、所司)方御附休所に引取、御兩卿方其外御退出(忠義、所司)ニ節、玄關迄御取締懸與力御案内仕候積、

但、一同常服(忠義、所司)ニ積、下廻り及御見(忠義、所司)ニ節、御沓取扱候者計御召連、雨天(忠義、所司)ニ節(忠義、所司)テ手傘御用(忠義、所司)ニ積、

一右御退出後、大隅守方取次并雜掌に御預ケ(忠義、所司)ニ儀并御締等心附候様申渡、口(忠義、所司)ニ錠鍵(忠義、所司)テ、組(忠義、所司)ニ者方爲引渡、即日方雜掌仕丁止宿勤番爲仕候積、

以上

及御見順書

- 一御兩役衆御休所、
- 一關白殿御休所、
- 一同便所、
- 一講堂東(忠義、所司)ニ間、
- 一講堂

弘化三年閏五月二十八日

七七九

- 一椽座敷南々西に折廻り、
- 一次ノ間、
- 一儒者詰所、
- 一御附休所并便所を御見通し、
- 一取次御賄頭與力等詰所并便所を御見通し、
- 一雜色之間并廊下、
- 一堂上方臺子之間、
- 一堂上方御休所并便所を御見通し、
- 一地下休所并便所を御見通し、
- 一地下臺子之間、
- 一玄關并内玄關を御見通し、玄關を御下り、御沓相廻し候様程合考、組
者御家來と案内仕候積
- 一雜掌居所仕丁居所番所等下々及御見、
- 一供待、
- 一御文庫、
- 一南井戸御見通し、直ニ講堂白砂階を御上り、如元御休所に御入、

以上

學習所經費
豫算

學習所年分御入用凡積、

- 一銀七百五拾六匁 學頭
- 但、七人扶持、此米拾貳石六斗代、
- 一銀七百五拾六匁 學頭
- 但、右同斷、
- 一銀五百四拾目 年番
- 但、五人扶持、此米九石代、
- 一銀三百貳拾四匁 雜掌
- 但、三人扶持、此米五石四斗代、
- 一銀三百貳拾四匁 雜掌
- 但、右同斷、
- 一銀三百五拾八匁 仕丁
- 内、百八匁、壹人扶持、此米壹石八斗代、貳百五拾目御給銀、

弘化三年閏五月二十八日

一銀三百五拾八匁

但、右同斷、

一金拾八兩

此銀、壹貫百五拾貳匁、

一金拾八兩

此銀、壹貫百五拾貳匁、

一金九兩

此銀、五百七拾六匁、

七八二

仕 丁

講師壹人 一ケ度金貳百疋

月々三ケ度

年分三十六ケ度料

讀師壹人 一ケ度金貳百疋

月々三ケ度

年分三十六ケ度料

有職壹人 一ケ度金百疋

月々三ケ度

年分三十六ケ度料

學生壹人 一ケ度金百疋

一金九兩

此銀、五百七拾六匁、

一金貳兩

此銀、百貳拾八匁、

一金貳兩

此銀百貳拾八匁、

一銀三百六拾目

月々三ケ度

年分三十六ケ度料

警固與力御手當二季

金壹兩充會日壹人宛

出勤料積

同同心御手當同斷會日

貳人宛出勤料積

會日雜用料 一ケ日銀拾匁

月々三ケ度

年分三十六ケ度料

但、茶田葉粉盆火鉢、且筆紙墨、此内ニ有出來見込候得共、難出來節、惣御入用御餘銀之内ニ有、出來積、

弘化三年閏五月二十八日

七八三

一銀貳百拾六匁

講讀師壹人充辨當料
壹ケ度 人別三匁
年分三十六ケ度ニ料

但、學頭兩人ニ内ニ候ハ、辨當料不被下積、

一銀貳百拾六匁

有職學生壹人充辨當料

壹ケ度 人別三匁
年分三十六ケ度ニ料

一銀五拾四匁

御用懸執次壹人辨當料
壹ケ度壹匁五分
年分三十六ケ度ニ料

但、御賄頭勘使等ニ内壹人御取締掛與力を見廻リニ付、辨當料不被下積、

一銀六百目

御修復并諸道具損直料
一ケ年分

但、年々小繕時々大破修復料共平均見込、

貳ケ年目諸生上中下

一金三拾兩

御褒美平均壹ケ年分
但不足ニ節老御餘銀ニ
多融通ニ積、

此銀、壹貫九百貳拾目、

一金五兩

五六ケ年目儒者諸生ニ
外、役々御褒美平均一
ケ年分、但不足ニ節老、
御餘銀ニ多融通ニ積、

此銀、三百貳拾目、

米壹石 六拾目立

合銀拾貫八百拾四匁

壹人扶持壹石八斗立

〔但、金老時々相場、〕

金壹兩 六拾四匁立

閏月御入用凡積

一金壹兩貳步

講師壹人壹ケ度金貳百疋

弘化三年閏五月二十八日

弘化三年閏五月二十八日

此銀、九拾六匁、

一金壹兩貳步

此銀、九拾六匁、

一金三步

此銀、四拾八匁、

一金三步

此銀、四拾八匁、

一銀三拾目

一銀拾八匁

七八六

三ヶ度ゝ料

讀師壹人壹ヶ度金貳百疋

三ヶ度ゝ料

有職壹人壹ヶ度金百疋

三ヶ度ゝ料

學生壹人壹ヶ度金百疋

三ヶ度ゝ料

會日雜用一ヶ日銀拾匁

三ヶ日ゝ料

講讀師壹人充辨當料

壹ヶ度 人別三匁

三ヶ度ゝ料

有職學生壹人宛辨當料

壹ヶ度 人別三匁

三ヶ度ゝ料

御用懸執次壹人辨當料

壹ヶ度壹匁五分

三ヶ度ゝ料

學頭七人扶持、此米

壹石五升代、

學頭七人扶持、此米

壹石五升代、

年番雜掌五人扶持、此米

七斗五升代、

雜掌三人扶持、此米

四斗五升代、

七八七

一銀拾八匁

一銀四匁五分

一銀六拾三匁

一銀六拾三匁

一銀四拾五匁

一銀貳拾七匁

弘化三年閏五月二十八日

弘化三年閏五月二十八日

一銀貳拾七匁

一銀九匁

一銀九匁

合銀六百壹匁五分

但、三ヶ年目ニ閏月有之積を以、合銀六百壹匁五分を三ヶ年ニ割平均、
貳百目五分

前書拾貫八百拾四匁ニ、閏月分平均貳百目五分差足、

都合拾壹貫拾四匁五分

拾八貫目ニ差引

六貫九百八拾目餘

年々御餘銀

(朱書)

右を以、書物御買上、釋奠等御入用、其外會日雜用紙筆墨等見込銀高ニ多、不足ニ分并

七八八

雜掌三人扶持、此米

四斗五升代、

仕丁壹人扶持、此米

壹斗五升代、

仕丁壹人扶持、此米

壹斗五升代、

雜掌仕丁風呂行水等諸雜用非常用蠟燭且臨時入用等御手當ニ積、

(朱書)
「此文面、御附へ御達候書取ニ有之候間、廿七日御書取ニ相添被遣候帳面ニハ相除ク、」

○閏五月十二日

學習所御印肉朱上品ニ方御治定候事、

尤、丹々兩様共調進被仰付候事、

同所御印字様書博士ニ被 仰付候ニ付、下行外印ニ例見合、此度ニ三石被充行候様殿下被
命候事、

三石尤代銀定ニ積候事、

同所御造立、早々御入用ニ御書籍、別紙ニ通相調候様仕度候事、

古註 五經 廿部

朱註 四書 卅部

五經 大全 十部

論語 古義 十部

孟子 古義 十部

學習院入用
書目錄

弘化三年閏五月二十八日

七八九

弘化三年閏五月二十八日

白文四書

同五經

十部

十部

七九〇

○閏五月十七日

學習所御取建、御内々御取調し頃迄、傳奏し御沙汰無之候處、御取建御治定に付る迄、御取調し儀も有之、則昨巳年十一月、右傳奏轉法輪大納言被 仰出候付、二季銀十枚宛被下度御沙汰候、

一學習所諸道具御内々御取調し節迄、印し儀御沙汰無之候得共、御取建御治定に付るハ、文化五年外印新調進被 仰出候付、下行米七石貳斗九升壹合三勺五才、代銀四百三拾七匁四分八厘被下度候、

一右、文字書博士に被 仰付候に付、文化度外印執筆候書博士岡本治部大輔に下行米三石被下候例を以、此度も三石代銀百八拾目被下度候、

右迄、兼多見込し外に有、殊に諸道具并年分御入用等可相成丈簡易に御規定有之方、後年御取締にも可相成、勿論に候得共、無據増方し事候得迄、御餘銀し内を以被下候様いせし度候事、

見返に 明 樂

古註五經以下七ヶ點書名關白殿御命し由、被成御達候處、右迄去巳十二月中御達御座候堂上方に拜借被 仰付、御書籍御取揃し分有、年分被進銀拾八貫目程し内を以、此節御買上可相成哉に付、御達御座候儀に付、酒井若狹守(忠義、所可代)にも可相達置儀に候哉、又私共取扱候儀に御座候哉、取調し手續も御座候間、否被 仰聞候様仕度、此段相伺候事、

閏五月

付札

書面し銀高し内を以、書籍御買上し相成候様、各に宜被取扱候事、

○閏五月十八日

見返に 明 樂

學習所御普請懸りし面々、下々迄名前可申上旨被仰聞候處、右迄初發より御取締懸る取扱、別段御用懸りし不被 仰付、定御修理方にも仕立候儀に御座候間、見廻り等名前別紙懸御目、此段申上候事、

閏五月

田村 伊豫 守
明 樂 大 隅 守

弘化三年閏五月二十八日

七九一

學習院普請
掛氏名

弘化三年閏五月二十八日

七九二

渡邊筑後守(兼後附)

繁々見廻り

小堀勝太郎

中井岡次郎

御入用取調役

猪俣英次郎

日々代ル々見廻り

田村伊豫守組與力

前田忠次郎

飯室彌一郎

伊奈遠江守組與力

上田鐵之助

加納繁三郎

明樂大隅守組與力

榎本儀作

渡邊筑後守組與力

石川嘉一郎

御普請役

安藤彌四郎

桑山右八郎

田村伊豫守組同心

伴五郎兵衛

平川鐵藏

近藤唯助

山田作太郎

小寺仲藏

伊奈遠江守組同心

櫛橋十左衛門

松原久米造

飯田長左衛門

弘化三年閏五月二十八日

七九三

弘化三年閏五月二十八日

七九四

森 彌五郎
笹井 作次郎
明樂大隅守組同心

鈴木 幸太郎
福岡新五左衛門

渡邊筑後守組同心

平井林右衛門
加藤 孫之進

小堀勝太郎手代

定御修理方

中川善右衛門
塚原 半助

右同斷

御場所附切

鷹尾熊八郎

石川 三平

中井岡次郎支配棟梁

日々代ル々見廻り

安田 匠太夫
今村 津太夫
岡島 彌太郎

右同斷

御場所附切

今村 秀助
乾 基三郎

以上

〔御用日次〕

○德大寺實堅武家傳奏記錄
東京帝國大學所藏本

閏五月廿八日、○中

一御退出、午剋
過、

掛、學習院出來ニ付、爲引渡、御兩卿并學習傳 奏學頭等御立會ニ事、

弘化三年閏五月二十八日

七九五

學習院竣工
ス

弘化三年閏五月二十八日

〔二條往來〕○德大寺實堅武家傳奏記錄
東京帝國大學所藏本

今度學習所御取建、御普請諸事丁寧、殊奇麗、早速出來、
御滿悅被

思召候、

右に趣、關東に宜被申入し旨、
御氣色候、以上、

閏五月廿九日

酒(忠義、所司代)
井

坊(俊明、武家傳奏)
城
德大寺(實堅、同)

〔學習院日記〕○宮内省圖
書寮所藏本

一閏五月廿八日、御引渡之上、

一當番初度止宿、雨天、

一今日御引渡に付、御出席五卿并役々列座之面々、尙爲後來記之、

座田右兵衛大尉

德大寺大納言殿(實堅)

坊城前大納言殿(俊明)

三條大納言殿(實馬)

勘ヶ由小路前中納言殿(查善)

東坊城宰相殿(龜長)

附武家 明樂大隅守(俊正)

御用掛取次 土山阿波守(武宗)

學習所雜掌 座田右兵衛大尉(雅貞)

井上主税(俊定)

稻波主膳(德)

御賄頭 安川與左衛門

勘使 鈴木權十郎

修理職 人見中務

中詰 田中左近番長

御給 勢多左衛門大尉

御取締與力 石川嘉一郎

立合與力 佐和善十郎

村上百助

組同心 小笠原芝之助

吉田定之進

江坂市之進

荒川伊八

福岡新左衛門

平井林右衛門

仕丁頭 坪川嘉七郎

學習所仕丁 丑之助

宗吉

弘化三年閏五月二十八日

七九七

七九六

〔菅葉〕○五條爲定日記
宮内省圖書寮所藏本

閏五月廿八日、壬子、終日多是小雨、清岡三位長材・少納言爲政朝臣等來、學習所御造立今日引渡候旨、爲心得自奉行兩卿被示、

〔土山武宗日記〕○宮内省圖書寮所藏本

閏五月廿八日

一學習所出來引渡ニ付、同列兩人著常服、已半剋比、右同所へ相廻ル、掛リノ傳奏並學頭ニ堂上方兩人等、茶烟草盆所役ト云々、午剋過、相濟、引取、

〔學習院日記〕○宮内省圖書寮所藏本

六月十七日

一當番

稻波主膳

一勘解由小路殿（座田）御招ニ付、參上候處、來廿三日已剋、地鎮祭ニ付、三人共麻上下着用、參院可仕旨、被命候事、尤過日東坊城殿（廳長）、御達同様之事、十八日

一當番

座田右兵衛（雜）大尉

一渡邊甲斐守罷出、講堂御間向夫々拜見ニ事、

一土山阿波守參院、前顯地鎮祭ニ付、御地面ニ内、四方角、且中央ニ糸巾八寸、深サ三尺ニ穴爲堀、右下土一握宛紙包ニ致シ、方角中央共夫々所相記、廿日迄ニ御所ニ相廻吳候様談有之、修理職方々取計候者、罷出候旨、

但、右紙包ニ致候土上ニ所書記し吳候様相廻候節、文庫ニあも御所方差越可申候事、

八月廿八日

一當番

井上主税

一就地鎮祭（マ）ニ付、御玄關以奥開戸掃除之事、

一參集三人、

一參院、土山阿波守・徳岡典膳（坪川喜七修理職下
一人手傳等來ル）罷出、圓坐火鉢等相廻ル、仕丁頭取計ニ事、

御手水桶等、過日相渡候品、相用候事、

一參院、幸徳井陰陽助（衣冠）隨身一人（淨衣）、地下之間ニ而休息、出會阿州雜掌三人、頃剋後祭壇出來ニ付

東坊城殿（廳長）ニ申達ス、只今祭壇設相具候趣書付、以仕丁相達ス、

一東坊城殿、御參院、勘解由小路殿（兼）、御所勞ニ付、御斷之由、御出迎式臺（兼）ニ阿州、下坐敷（兼）ニ雜

掌三人、御休息之間、御引、御茶煙草盆等雜掌差出ス、阿州罷出、雜掌三人共暫時陰陽助祭場に進、御玄關南方ヨリ、

一講堂階前、一間餘、建祭場、三間、四方幕、北方計卷幕祭壇、五色幣帛中、陰陽助著座南階下、西方圓坐設、阿州・典膳・右兵衛大尉・主膳、（唐田雅貞）申合、仕丁頭・修理職下壹人罷出、出座之趣、御奉行に申、即御著座階上、西方圓座、鎮祭之式終、未剋前御奉行御休息間退去、陰陽助箱物ヲ中央四隅に相納、典膳見分、渾而相濟、御奉行御退去、御送如初、番所下坐、其後阿州以下、退散之事、

〔東坊城聰長日記〕

○宮内省圖書寮所藏本

七月一日、甲申、晴、依召參關白殿、於梅殿令出逢給、被仰云、

一〇中略

一學習院造立勸賞之事、當家諸大夫、（高橋）賜物、近例女御入内前駈勤仕、於非藏人口賜物、准例可取計、去日右之例、（實萬）三條尋了之間、被示云々、

○是ヨリ先、天保十三年十月十七日、朝廷、學習所ヲ創設シテ公卿子弟ノ教育ニ當ラシメントシ、議奏三條實萬ヲ學習所傳奏ニ、前權中納言勘解由小路資善・參議東坊城聰長ヲ學頭奉行ニ任ゼリ。今次其營繕ノ工ヲ竣ヘ、幕府ヨリ引渡サレタルモノトス。

然モ京洛諸地ノ淫雨ニ加ヘテ新清和院崩御ノコトアリ。開講ノ期遅レ、遂ニ八月廿八日地鎮祭ヲ執行シ、翌弘化四年三月九日ヲ以テ開講セリ。今參考ノ爲メ、天保十三年以降學習所創立ニ關スル朝幕交渉ノ史料ヲ收ム。

〔武家傳奏達〕

○孝明天皇紀所載

○天保十三年十月十七日所司代へ

一（朱書）天保十三年十月十七日、於宮中牧野備前守殿へ御直達、

堂上風儀不
宜學習所設
置ノ要ヲ幕
府ニ達ス

堂上風儀、近來別而不宜、身柄不相應之進退等、每度種々風聞有之、叡慮ニモ如何哉ト被思召候ニ付テハ、專學問ニ志シ候テ、聊ツ、ニテモ知道義候ハ、追々風儀モ可相改哉、何卒學習之場所御取建ニテ、實行之學道御勸誘被遊度、右場所建物等之儀、關東ヨリ可然様被成進候様ニ被遊度、御内沙汰候、此段先其許迄、宜申入之旨、關白殿被命候事、
近來、別而堂上風儀不宜、身柄不相應之遊興、卑俗之服著用、遊里へ忍行之人々モ有之歟之風聞、時々相聞候ニ付、被加制止候得共、兎角不相止、不法之進退致增長、（關白致趣）關白殿ニモ誠以被恐入、且暮ニ深御心配被成候、往古ハ大學寮四姓學校モ有之候得共、當時廢絶候、慶長十八年被仰出候ニモ、第一公家學問ト御座候ニ付、年來何卒致學問候様被成度御存念ニ候得共、堂上困窮之人々ハ、授教師招請モ難出來、束修整兼候ニ付テ、不學文官之輩多相成候次

第、誠以御心配被成候ニ付テハ、學校杯ト申候テハ、禮式作法之古禮モ有之候儀、御大總ニモ相成可申、其上六藝杯ハ、堂上ニハ先必用ニモ無之候間、責テハ習學所被仰付、若輩之人々成共、月ニ兩三度計教授有之、性行端正篤信ニ相成、往々ハ務向不進退モ無之様ニ被成度、全習學之爲ニ清菅兩氏、又ハ聊心懸ケ候人ヲ兩人計モ被撰之、專場所以下御預リ、又外ニ六員計有識學生商量被仰付、京住篤實之儒業之士ヲ被召、素讀及講釋指南被仰付、御會釋物并諸雜用、且建物修復書籍等之料、何卒關東ヨリ被成進候様被遊度、大體堂上四十歳以下十五歳以上、非藏人二百人許、并御内勤之者ニモ諸司官人子弟之外等ニモ、追々相願候者ハ、人數ニ可被加候、右之次第故、年々御用途、凡合米五六百石餘程被充行候得ハ、精々質素ニ可被仰付候得共、堂上地下諸生往々之御見込ニテハ、三四百人許ニモ可相成哉、其中ニテ隔年位ニ昇殿之人計成共、御殘用途ニテ、上中下出精之御褒美、聊成共被下候得ハ、自然ト風儀モ改革、研學有之、往々御役ニ相立候半人柄ニ相成可申、餘リ年次ニ御叱之人計ニテ、上之思召モ深々被恐入候、右場所ハ、當時開明門院御舊地歟、又ハ外ニ御築地内ニテ、差支ニ不相成候場所ニ被取建候様ニ被成度、此等之儀其許ハ宜申入、關白殿被命候事、

〔續泰平年表〕

○東京帝國大學所藏本

(續泰平年表)

學習所聯語
下賜

天保十三年十一月、所司代に御達、堂上方習學所御取建儀ニ付、先達多年寄衆方申來候趣を以、傳奏衆に差出候書取寫繪圖面等、江戸表に相達候處、右習學所に儀、繪圖面に通、開明門院御舊地に御取建可被成進旨、被仰出候間、可被得其意候、右、習學所御取建し時、叡慮を以、同所に聯を被爲懸、其御文ニ云、
履聖人之至道、崇皇國之懿風、不讀聖經、何以修身、不通國典、何以養正、明辨之務行之、とあり、
右、作文を三條大納言實萬卿、執筆を關白太政大臣政通公と也、

〔武家傳奏達〕

○孝明天皇紀所載

○弘化元年十月所司代へ

一昨寅年十月、牧野備前守當地勤役中、以書取申入候習學所之儀、其後關東ヨリ未何之御沙汰モ無之候哉、如何之御模様ニテ候哉、無急度其筋へ御催促有之度、此段宜申入、關白殿被命候旨、申入候趣、關東へ被相達候所、右書類御本丸炎上後、穿鑿中之所、此節ニ至、右書面御燒失相成候段、其筋ヨリ申出候事ニテ、何分差支候儀ニ付、最初ヨリ追々之書面取揃、被差越候様被致度、此段兩人へ内々被示聞、早々被差越候様、老中方ヨリ被申越候由、依之追々差進候書取等寫、差進候様ニト被存候旨、被示聞之趣、令承知候、則去々寅年十月申入

弘化三年閏五月二十八日

八〇三

候書取寫一通、差進之候、此外習學所之儀ニ付、其許御役宅へ兩人ヨリ往復之儀ハ無之候事、

○弘化二年十一月二十七日所司代へ

堂上學習所御取建之儀ニ付、先達テ被示聞差進候書取寫、關東へ被相達候處、右學習所之儀、開明門院御舊地へ御取建可被成進旨、被仰出候間、學習所諸道具并同所年分御入用等、可成丈簡易ニ御規定有之候方後年之御取締ニモ可相成儀ニ付、諸道具ハ銀貳貫九拾目、年分御入用ハ、凡銀拾八貫目程ヲ日當ニ致シ、可成丈不相増方ニ厚勘辨有之、申立候様、兩人へ可被相達旨、老中方ヨリ被申越候由、被示聞之趣、令承知及言上候處、右之通被成進候上、實行之學道被遊御勸誘候ハ、堂上之中不宜風儀モ、追々可相改ト叡感不斜候、依之今般開明門院御舊地へ、學習所御取建之事、今日夫々へ被仰出候、此旨宜有言上候、以上、

十一月廿七日

坊城前大納言俊明

德大寺大納言實堅

酒井若狹守殿忠義

二十八日子 鹿兒島藩主島津齊興、琉球外艦ニ對スル指揮ノ爲、世子齊

學習所取立
決定ノ件

彬ヲ歸藩セシメンコトヲ請フ。是日、幕府、之ヲ聽ス。

〔島津齊興伺書〕

○維新史料編纂會所藏本
澁江朝書所載

閏五月廿三日若殿修理大夫
殿御暇願書寫

私領琉球國に異國船渡來致し候儀と、委細及御届候通御座候付ゑと、自然琉球表、人氣不穩儀も難計、勿論領内取締向に儀と、兼々嚴重申付置候儀こと有之候得とも、此上猶精々取締手配等、悴修理大夫に申含、差遣度、依之御暇被下置候様相願度、此段御内意相伺候、以上、

午閏五月廿三日

松平大隅守

御附札

願と通、修理大夫に御暇被下り可有之候、

〔鹿兒島藩主島津齊興届書〕

○内閣記録課所藏本
弘化雜記所載

閏五月阿部伊勢守様に差出

私領分琉球國に、異國船渡來に付、家老と内、爲名代早速國許に差下シ、重ゑと模様次第御暇可相願含候得共、不容易事柄に付、私儀と於當地同等と品も可有之候間、嫡子修理彬

弘化三年閏五月二十八日

八〇五

鹿兒島藩世
子島津齊彬
歸藩ヲ請フ

弘化三年閏五月二十八日

大夫御暇被下候ハ、諸事取締向、應機不失

御國威、寛猛も場、程能爲致指麾候様仕度、此段相願申候、以上、

閏五月廿七日

松平大隅守

〔老中阿部正弘達〕

○公爵島津忠重所藏本
島津家國事雜掌史料所載

閏五月廿七日、阿部伊勢守様ヨリ御留守居御呼出ニテ、御封書被成御渡候ニ付、

御前へ差上、御開封被遊候處、御別紙之通、被仰進候、

琉球國へ異國船渡來之儀ニ付、不取敢家老共之内、國許へ差下シ、重テノ模様ニ寄り、其方

ニモ御暇可被相願トノ趣、被申聞候へ共、今般之儀ハ、不容易次第ニテ、事柄ニ寄り候テハ、

御國體ニモ拘リ可申程之儀ニ付、其方儀早速御暇可被相願答ニ候得共、彼地之模様次第、

於當地伺、其外取計等之品モ可有之候間、嫡子修理太夫御暇被相願、早速國許へ相越、諸事

之取計、并取締向等、應機變不失

御國威様、寛猛之場合、程能熟慮指麾有之候方ニ存候事、

別紙之通、相達候ニ付テハ、明廿八日御暇願之儀、可被申聞候事、

大隅守儀ハ、悴御暇之御禮願書被差出候儀ト存候事、

閏五月廿七日

島津齋彬歸國ニ付上使差遣

齋彬歸國允許セラレ

齋彬六月三日頃江戸ヲ發足セン

〔通航一覽續輯〕

○内閣記録課所藏本

弘化三年閏五月廿八日

上使

牧野備前守
(忠雅、老中)
松平和泉守
(兼全同)

松平修理大夫

父大隅守爲名代、國元ニ御暇相願候ニ付、被遣之、

〔鹿兒島藩側役書翰〕

○公爵島津忠重所藏本
島津家國事雜掌史料所載

此節、琉球國エ異國船渡來ニ付、昨夕御用番阿部伊勢守様ヨリ、御封書ヲ以テ御達之趣、被

爲在、(兼彬)少將様御國元エ之御暇御願書御先手ヲ以テ、今朝御進達被成候處、今日上使戸田

山城守様ヲ以テ、(忠通、老中)少將様御國元エ之御暇御給、御拜領物被遊候、

右大將様ヨリモ、

上使松平和泉守様ヲ以、御拜領物被遊候、右ニ付、來月朔日御暇之御禮被 仰上候御模様

ニ御座候、左候ハ、來月三日四日比ニハ、爰元 御發駕被遊候儀御内定ニテ、御手當等之

儀、大混雜ニテ、今日迄ニ何モ難申越、當月二日モ被召延、就テハ、來月三日二日被差立候

付、右便又ハ御中途ヨリ、追々申越候様可致候、(坂山久徳)尤將曹殿并私共兩人エ

弘化三年閏五月二十八日

上使濟後、直ニ御下向御供被仰付候、自ラ御家老衆ヨリ御問合可被仰越候へトモ、御心得迄ニ、此段申越候、已上、

閏五月廿八日

名越彦太夫
種子島六郎

御國元

御側御用人衆

〔續泰平年表〕

○東京帝國大學所藏本
史談會本所藏

閏五月廿九日、松平大隅守齊興、國許に俄御暇被仰出、

右迄、琉球國にイキリス船フランス船渡來軍船に由、乗組凡三百人餘云、

○齋彬其父齊興ト共ニ登營、琉球處置委任ノ將軍直諭ヲ受クルコトハ、六月朔日ノ條ニ在リ。

二十八日壬子 浦賀奉行大久保忠豊、屬吏ヲ米國軍艦ニ遣シ、國法ニ依リ、滯泊中兵器ヲ撤スベキヲ諭ス。提督、肯ゼズ。忠豊、不虞ヲ慮リ、特ニ警戒ヲ加へ、急ヲ幕府ニ報ズ。

〔浦賀奉行大久保忠豊上申書〕

○外務省所藏本
續通信全覽所載

浦賀奉行米艦在泊中其ノ武器ヲ撤收センコトヲ求ム肯ゼス

〔奉表〕
異國船に儀ニ付、猶又申上候書付、
大久保因幡守

追々申上候亞米利加船、軍船ニ當國へ乗込候子細、通詞を以、爲相尋候處、廣東へ通信に儀ニ付、軍船に相越、夫より當國へ、交易に儀相願度、罷越候儀ニ有、態と軍船ニ有、當國へ差向候儀ニ有無之由、申聞候、且又望に品相尋候處、別紙に通、相願候由、申聞候間、差遣可申と奉存候、出帆に節相渡候御定に御座候に付、再應爲申諭候得共、軍船に儀故、武器類一切難差出旨申聞候、強多申渡候得と、及爭論可申難計候に付、兼多申上置候通、浦賀表より貳里程隔候場所へ、船爲掛留私共組松平大和守〔川越藩主、齊興〕
〔勿藩主、忠豊〕、松下總守家來申合、無油斷警衛仕候、此段猶又申上置候、以上、

閏五月廿八日

大久保因幡守

覺

- 一水 五千本
- 一薪 四拾羽
- 一鷄 三 百
- 一鷄 卯

弘化三年閏五月二十八日

弘化三年閏五月二十八日

八一〇

- 一小 麥 貳 俵
- 一粃 貳 俵
- 一竹細工菓子籠 二十
- 右に通御座候、以上、

閏五月

〔浦賀奉行大久保忠豊公用狀〕

○内閣記録所藏本
通航一覽續編所載

弘化三丙午年閏五月廿八日、浦賀奉行御届御用狀、
以早便得御意候、

一此度渡來に異國船、追々見糺し候趣、申上置候得とも、今朝組に之の通詞差遣し、猶又船
中し様子等爲相尋候處、不容易相聞、武器嚴重よて、疑敷被存候間、別紙に通申上書、
取調差進候、御一覽に上、早々御進達可被成候、尤右に趣無急度兩家家來にも爲心得相
達置申候、
右に趣、早々得御意候、

閏五月廿八日「未中廻出」

大久保因幡守

一柳一太郎様

〔浦賀奉行大久保忠豊上申書〕

○外務省所藏本
續通信全覽所載

(巻表)
異國船御固筋儀に付、申上候書付、大久保因幡守

此度渡來に亞米利加船貳艘共、昨日申上候通、浦賀湊より凡貳里程隔候沖合へ掛止、私共
組并松平大和守・松平下總守家來共申合、無油斷相固罷在候得共、軍船殊より多人數乗組、武
備嚴重に付、今曉伺置候通、御下知有之、望に品相應に相與、通商を難相成段申諭、速に退
帆仕候得と、子細無御座候得共、若相拒候節と、如何様と始末可相成も難計、深心配仕候、
今朝爲通辯組に者并通詞差遣、様子爲見届、私儀も御臺場より以遠眼鏡、得と勘考仕候處、
人物等も不容易躰に付、逆心を有御座間敷候得共、御固筋御手薄を恐と、万一に節手後
相成、御外聞にも拘り可申儀に付、大和守・下總守人數召連、當地へ爲御固出張可被 仰付
候哉、何れも海岸筋格別御固御座候方可然奉存候間、此段申上候、以上、

閏五月廿八日

大久保因幡守

〔川越藩相州四番記録〕

○前橋市立圖
書館所藏本

○閏五月二十七日

一浦賀御奉行大久保因幡守殿を御呼出に付、矢頭庄左衛門罷出候處、因幡守殿御直に被仰
聞候と、此度に異國船野比濱沖におゐる及通辯候處、右に處を能く相分り、同所を碇を

弘化三年閏五月二十八日

八一

川越藩米艦
ヲ浦賀湊ニ
入港セシム
ルコトノ不

弘化三年閏五月二十八日

八一二

卸し、落附罷在候に付、願ひ趣き有之、罷越候哉と相尋候處、願ひ趣き有之、罷越候旨申出願書も差出候得共、一向解兼候に付、專取調中ニ有之候得共、此度も異國船ハ、大筒始武器も多分備有之、不容易仕掛ニ有之、甚不安心ニ有之に付、迎も浦賀湊に引入候義を難相成に付、矢張野比濱沖ニ警衛致候外無之に付、其段江戸表へ被申上候旨、其譯を、湊に引入候得を、武器を不殘取揚置候掟ニ有之候得共、此度も異人々、中々容易に承知致間鋪模様ニ有之に付、湊に引入候義を難相成譯ニ有之旨、右に付るハ、申迄ハ無之候得共、御備嚴重ニ無之候るハ不相成旨、被仰聞候旨、

一因幡守殿御心附ニ被仰聞候を、右願ひ模様ニ寄候るハ、如何様の場合に可至哉も難計、不容易義に付るハ、此うへ御人數増有之、大和守殿にも、御出馬に義御伺被成候可然哉と存候旨、御咄有之、下總守殿にも御同様御心附に趣、御咄被成候積ニ有之旨、被仰聞候に付、承知に趣相答、退き、用人近藤保左衛門に面會の上、庄左衛門が申談候を、只今御直に被仰聞候趣、御尤至極に付、早速江戸表に心得にハ可申遣候得共、右願ひ趣き如何様も願ひ有之哉、解し候うへふらでハ子細も難相分義に候へハ、願ひ通御聞届相成候ハ、子細も有之間敷義と奉存候、仍るハいつも願ひ趣解得被成候ハ、早く御沙汰御座候様仕度、其模様ニ寄、早速江戸表へ申遣し、人數増草大和守出馬に儀、相伺候様申遣候可然哉と奉存候旨、用人に申談候處、御尤に付、異人願ひ趣、解得致候うへハ、早く御左右可申旨、保左衛門申聞候旨、矢頭庄左衛門申出之、

閏五月廿八日

一昨日矢頭庄左衛門御呼出の上、大久保因幡守殿御心附に趣、御直に被仰聞候、御人數増并御出馬に儀、異人願ひ趣御解得の上ハ、其模様ニ寄、早く申遣、出馬可致旨、庄左衛門申述候處、右に義を、專江戸表重役共存寄も可有之義に付、左様相心得吳候様、今日小嶋養右衛門差遣、浦賀用人迄爲申述候處、其義に付るハ、御咄申上度義有之旨に、奥に呼込、内々相咄候を、是迄を何分不容易船に付、今朝を表向、御兩家に御出馬に義御達申候調ニ有之處、昨夜通辯にうへ、解得致候所、全く通商に義を願出候義ニ有之旨、右に通願ひ趣も相分候うへハ、最早強ゝ案事候にも不及義、乍去、何分通商に義を、御法度に付、相成間敷と被存候、仍るハ御斷に相成候うへハ、如何様も變事に可相成哉を難計候得共、多分氣遣も有之間敷に付、表向御達に義を、被相止候旨に付、左様相心得吳候様、既に向地に表向及達候積に、呼出も懸置候得共、皆無右に義を相達不申旨、用人申聞候由、異人願ひ主意ハ、左に通ニ有之旨、寫申受候由、小右筆迄養右衛門が差出之、

弘化三年閏五月二十八日

八一三

弘化三年閏五月二十八日

八一四

アメリカハ支那と通商し信義を結ひ、彼地へ數月滯船致し、今本國に可歸候所、態と御當地に渡來仕候、其次第ハ、支那同様御當地におゐるも、交易し道を開願せん爲こ御座候、若御免し御沙汰を蒙り候ハ、日本通商し義を、御國法通こ相守可申、我政司こおゐるも奉差上候扣文し趣意、通信致度存念こ御座候、

〔川越藩主松平齊典届書〕

○前橋市立圖書館所藏本
川越藩相州四番記録所載

異國船渡來こ付、昨廿七日午ノ刻、大津人數觀音崎御臺場下に操出シ、嚴重こ相固候旨、且又浦賀奉行ハ異國船二艘、追々浦賀表に艇寄候こ付、固嚴重申付、大久保因幡守人數召連、平根山御臺場に出張致、此上地方に近寄候ハ、湊内に引入、繫止通辯しうへ、取計方伺候段、御注進申候旨、彌湊内に引入候ハ、固船し義、昨年し通相心得候様、浦賀奉行ハ彼地詰家來共に達有之候段、大津陣屋詰家來し者ハ注進申越候、此段致御届候、以上、

閏五月廿八日

御名
(松平大和守)

一昨廿七日、大久保因幡守ハ相効大津陣屋詰私家來し者、浦賀役宅へ呼出し、此度し異國船野比濱こおゐる及通辯候處、右之處を能く相分り、同處に碇ヲおろし、落付罷在候こ付、願し趣こある有之、罷越候哉ハ相尋候處、願し趣有之、罷越候旨申出、願書も差出候得共、

一向解兼候こ付、專取調中こ有之候得共、此度し異國船を、大筒始武器も多分備有之、不容易仕掛こ有之、甚以不安心こ有之こ付、逆も浦賀湊に引入候義を難相成こ付、矢張野比濱沖こ警衛致し候外無之こ付、其段江戸表へ申上候旨、其譯を湊に引入候得共、武器を不殘取揚置候掟こ有之候得共、此度し異人ハ中々容易こ承知も致間敷模様こ有之こ付、湊に引入候義ハ難相成譯こ有之、右こ付あり、申迄を無之候得共、御備嚴重こ無之候あり不相成旨、因幡守ハ達有之候、依之人數乗船致し、警衛向彌嚴重こ手配致置候段、彼地家來し者ハ申越候、此段致御届候、以上、

閏五月廿九日

御名

〔續通信全覽〕

○外務省
所藏本

○閏五月

今度異國船渡來し付、浦賀港内外及各所御固場

觀音崎
鴨居
津久井
城ヶ島

異國船渡來
ニ付浦賀港
内外警衛持
場ヲ定ム

弘化三年閏五月二十八日

八一五

弘化三年閏五月二十八日

八一六

右、松平大和守人數、相固之、

隊長家老小松原左京左津久井在陣、

平根山

右、在勤浦賀奉行大久保因幡守出張、

米倉丹後守人數、相固之、

鶴ヶ崎

右、浦賀奉行組與力同心、相固之、

六月朔日、在府浦賀奉行一柳(真方)太郎到着、

以後此所より出張、

仙臺鼻

長澤

上崎

右、浦賀奉行組與力同心、相固之、

燈明臺

右、保科能登守人數、相固之、

能比

右、大久保加賀守人數、相固之、

久里濱

右、酒井安藝守人數、相固之、

千艘浦

右、稻葉兵部少輔人數、相固之、

竹ヶ岡

富津

館山

右、松平下總守人數、相固之、

海上船手

右、松平大和守手船、

松平下總守手船、

御用船浦賀奉行組與力同心、

右、外、房總海岸より領地有之面々を、銘々領分海岸へ固人數差出之、

弘化三年閏五月二十八日

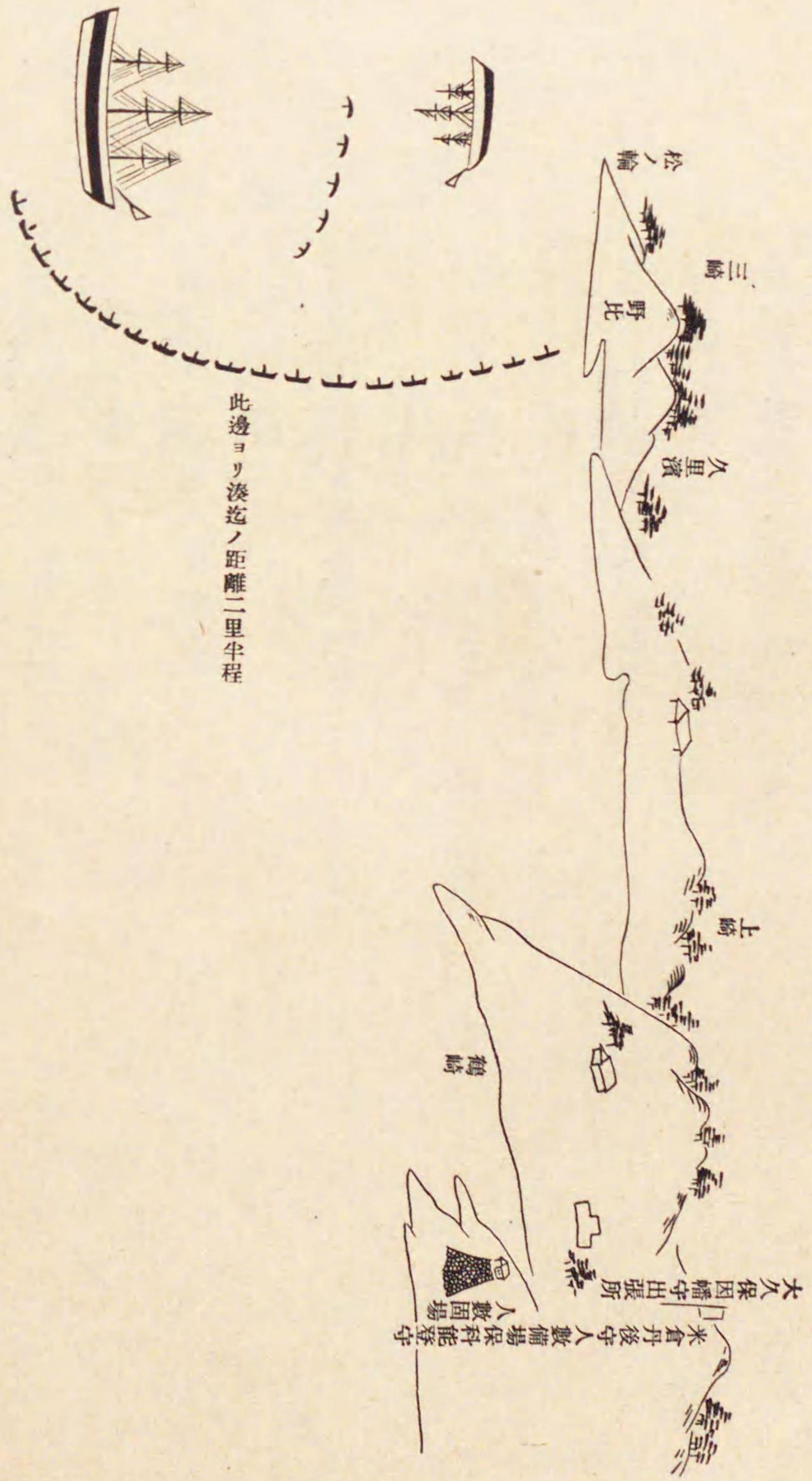
八一七

弘化三年閏五月二十八日

〔浦賀米國艦隊警固圖〕

○外務省所藏本 續通信全覽所載 「東京灣要塞司令部檢閱濟」

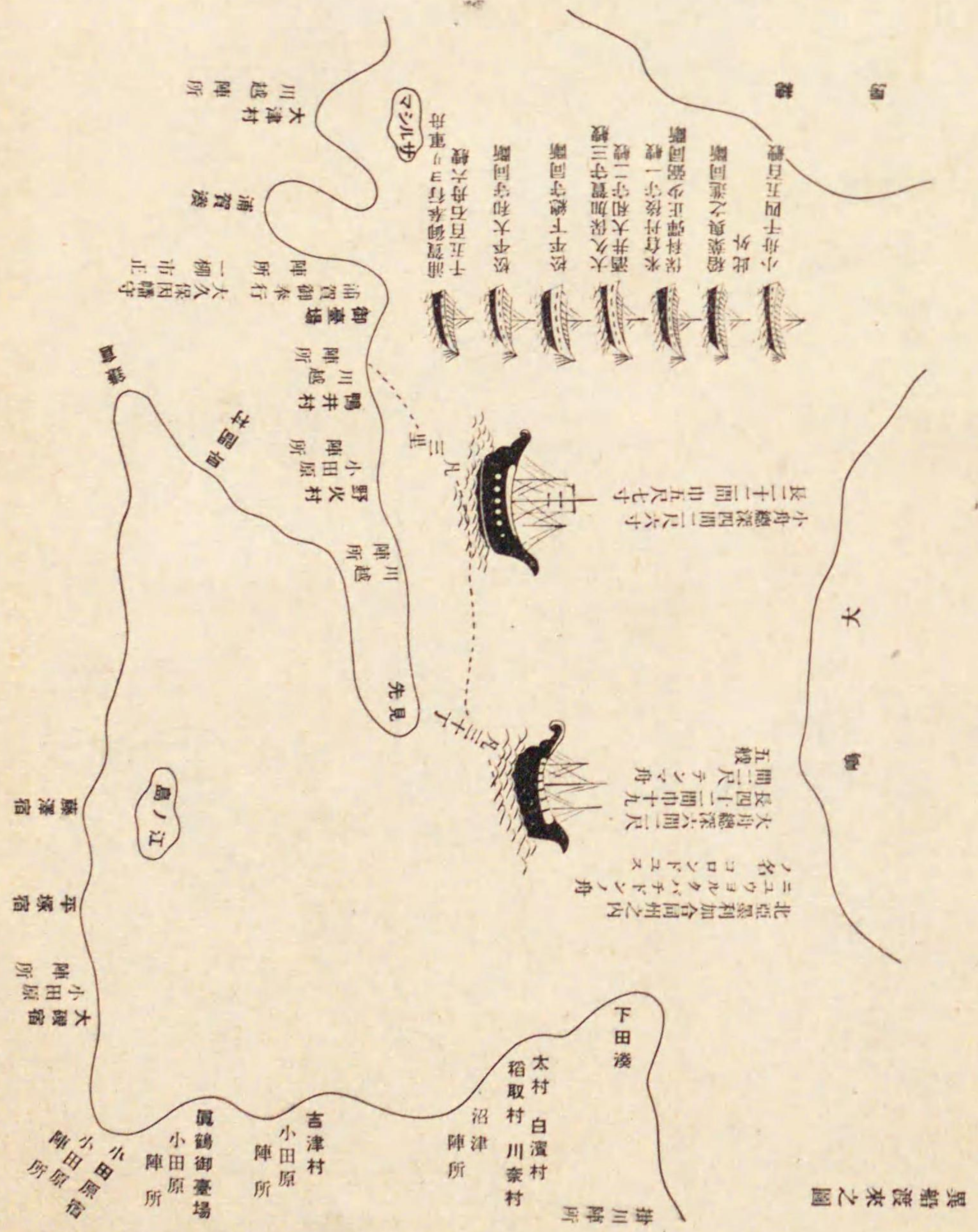
弘化三年閏五月



八一八

〔米艦二艘浦賀入津圖〕

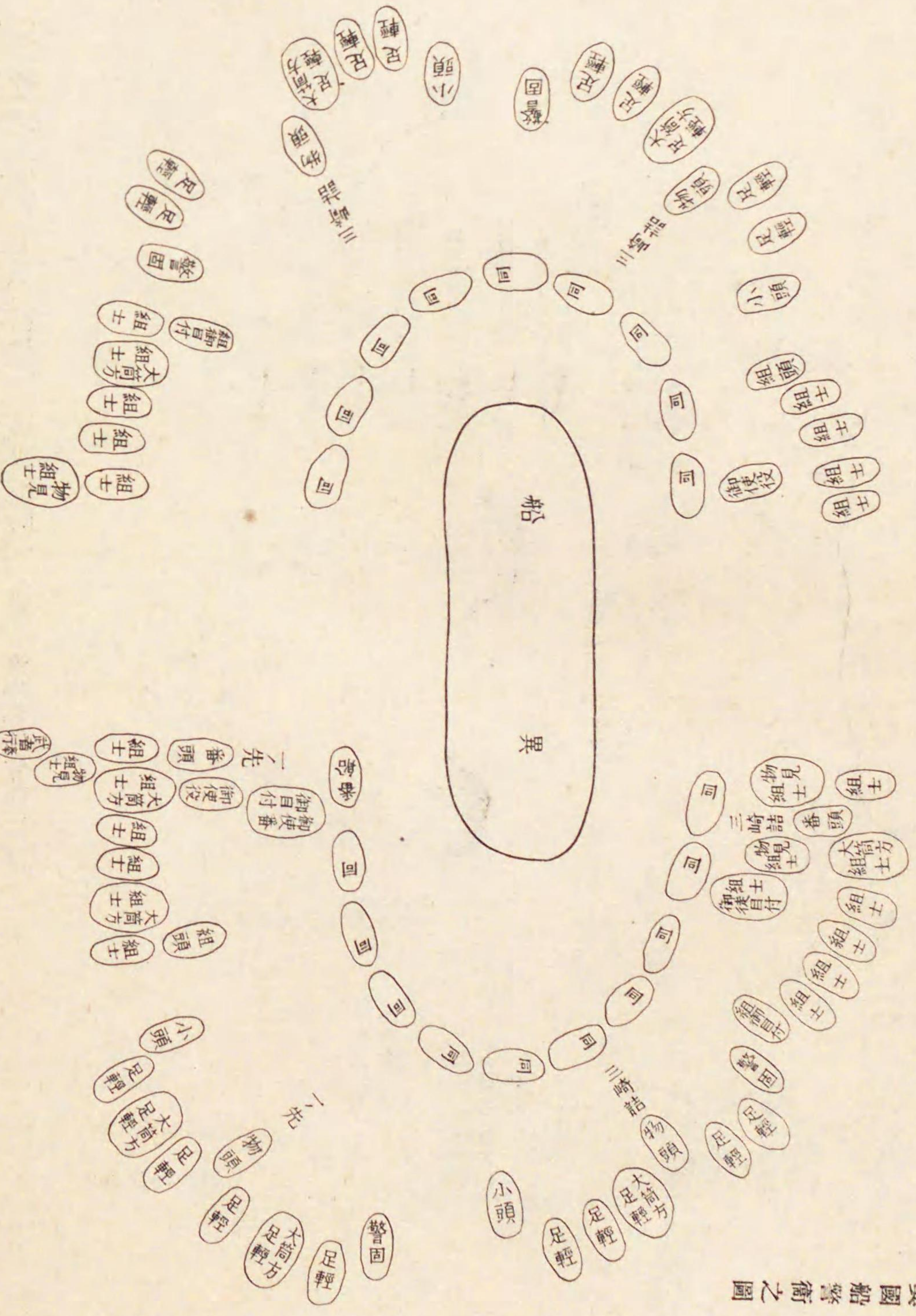
○内閣記録課所藏本 通航一覽權所載 「東京灣要塞司令部檢閱濟」



弘化三年閏五月二十八日

八一九

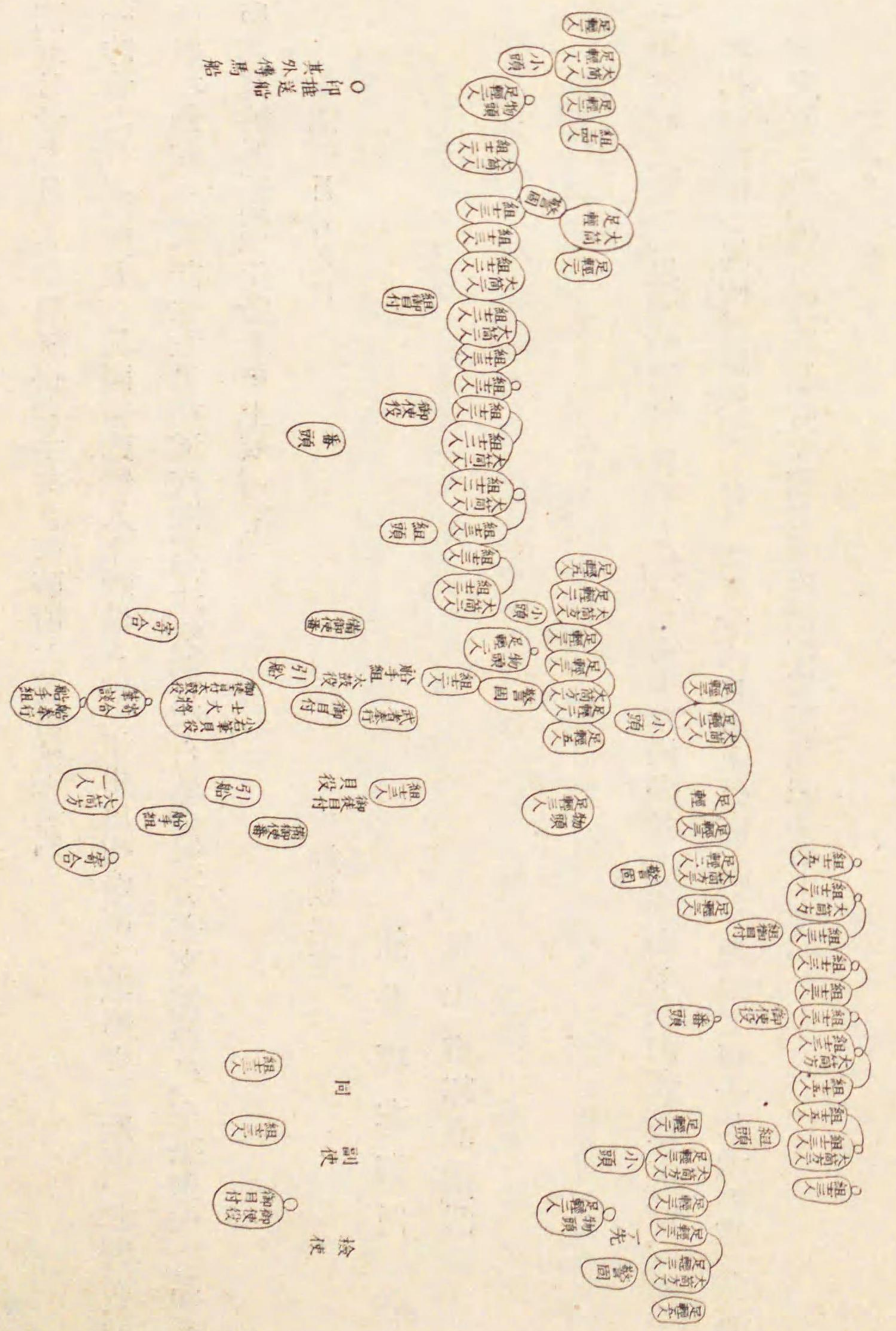
弘化三年閏五月二十八日



八二〇

異國船警衛之圖

弘化三年閏五月二十八日



八二一

甲推送船

弘化三年閏五月二十八日

八二二

異國船入津
ノ爲漁業減
少ノコト

〔高麗環雜記〕

○東京帝國
大學所藏本

閏五月廿九日、市中取締掛名主共、御賄所に差出候書面、

一昨廿七日、浦賀表に異國船貳艘入津致候に付、相州房州邊濱方漁船押送船等、其御筋御役船相勤候に付、諸魚漁業相減候間、御注文御品、自然御整方差支候節ハ、乍恐御代り品に多御聞濟奉願候、此段奉申上候、以上、

午閏五月廿九日

取締役名主

熊井理左衛門

鈴木市郎右衛門

○六月三日

米船ノ裝備

一相州浦賀表に、異國船渡來、異船に様子、市中取締掛名主共、密に取調差出候書面、相州浦賀沖に異國船貳艘着に付、先月廿八日申上候處、猶又彼地に様子及承候趣、御尋御座候に付、内々昨夜状着に趣并場所模様等風聞左に申上候、

アメリカカ船

長四拾間餘

幅拾三間程

八百人乗

大筒九拾三挺 壹貫五百目玉方貳貫目玉位迄

小筒七百挺程

人物上下と有之候得共、何れも人品宜敷、惣躰武備有之、和人よりハ丈ケ壹尺程宛も高ク、色白ク、鼻高ク、瘦形、髪を切髪に有、赤ク縮む候處有之、又黒天鷲絨に如きも有之、笠様も品を冠罷在、長と相見候者も、六拾才位、白髪に有、艫屋形に邊に座し、側こ渾天儀を差置き、重に讀書致居候由、船中ニ女と相見不申、水主躰に者ハ、淺黄色股引様も物を履き、肌腕等に植木鉢様も彫物致し罷在候、

同小船

長貳拾間程

幅五六間程

百人程乗

大筒三拾六挺

小筒角數不知

弘化三年閏五月二十八日

八二三

此船こハ、下輩じもの罷在候様子こ御座候、

右船、先月廿七日五半時頃、豆州附大嶋沖に相見候こ付、浦賀表注進有之、無間急早走こ
る浦賀沖に乘込、相州野比村海岸か大船じ方ハ凡壹里程隔、小船じ方ハ拾七八丁程隔、
右大船か小船じ間々貳拾町程も隔候多、船掛致、浦賀御奉行様松平大和守様御備じ様
子ハ、御固メ所御役人急御家來衆も陣笠陣羽織着、漁師百姓迄役じ者ハ、木綿法皮着、大
和守様ハ、三四百石積廻船并漁船魚船等壹艘毎こ數鎗（マ）壹本幟壹本高張提灯壹張宛、海岸
相固メ、大筒臺場其外人數小屋掛等出來、御取締有之候、尤漁師百姓歩役、拾五才以上か
六拾才迄を、御觸當こる相勤候得とも、惣躰じ御仕法、去年かハ物靜こいせし候、御備方
じ儀ハ、弛じ無御座候由、

一異船貳艘を、アメリカカカントウに軍事取合向ひ候處、漂流以多し、日本沖に近寄候こ
付、以來通商交易願候旨申立候由、且又彼地下説こハ、去年參り候異船乗組じもの、壹兩
人も相見候由、是ハ沖合案内こる乗組候哉じ趣こ風聞有之候、且右船を、同月廿九日願
筋難相成旨、船中こるも薄く承知いとし候様子こる、翌朔日、通商交易願不叶旨、急度申
渡有之由、

一船中に、鶏四百五拾羽程、其外御惠じ被下物有之由、且船中吞水ハ、小船こる被下候度毎、
下輩壹人キヤマンじ小器を持參り、水を汲、大船に持參、上官に渡候得を、吞試候多、差
圖致候様子こる、夫々草こも候哉、大綱様こ見得候ものを、大船か水有之大桶中に繰下
し候得を、暫時右水を大船に吸上ケ申候、

一浦賀續海岸相州鴨居、走り水邊こ、大和守様御固人數船等、所く備有之、東西浦賀海岸ハ、
御奉行様御持こる、御固メじ様相見、浦賀大筒臺場山手ハ、大久保因幡守様人數備有之
様相見得候、房州上總海岸ハ、松平下總守様人數備有之由、向ひ路じ義こ付、御備場じ様
子、相分り不申候、

右、御尋こ付、龜繪圖相添、密く風聞じ趣申上候、以上、

午六月

取締役 名主

○添圖ヲ略ス。

〔浦賀渡來米艦警備ニ就テ〕

○公爵島津忠重所藏本
島津家國事執掌史料所載

一異國人共、房州口へ乗入候様子ニ付、同所御臺場持松平大和守ノ由年番人數差出、指留警衛
罷在候旨申來、浦賀奉行大久保因幡守ヨリモ申來、依之在府ノ浦賀奉行一柳一太郎並御
鐵砲掛御先手井上左大夫、浦賀表へ相詰候由、六月朔日松平大和守・松平下總守持場へ
相越候様、内達有之、同二日阿部伊勢守宅へ、右兩家ノ家來呼出、彼ノ地へ被遣旨達、同

三日朝大和守發途、同四日朝下總守發途、惣勢六七千程(人馬カ)召連候由、アメリカ人、阿蘭陀人ヲ以通辭ニ致候由、

同月六日、異國船ニテ申渡相濟、同七日歸帆仕候由、尤被下物ハ、此節極祕ニテ難相分、
前文ハ、御城附ヘ申付、爲承候處、書出候故、記置

一右同時ノ頃、イギリス人參百人程、琉球ヘ上陸、依之大隅守養子松平修理大夫ヘ、以上使國許ヘ、御暇被遣、六月朔日、登營 御目見、同六日發足仕候、
前文ノ義ハ、琉球ノ處ヘ記シ置タレ共、御城附ヨリノ申聞有之故、再記

薩州ヨリ琉球ヘ渡船之時節、九月頃ヨリ二月頃迄、琉球ヨリ薩州ヘ渡船之時節、三月頃ヨリ八月頃迄ノ由ニテ、此節琉球人數渡船ニ差支候由ノ處、此節兵船貳艘出帆ノ處、一艘無恙到着イタシ候、一艘ハ行衛不相分旨、申來候由、

同時ノ頃、松前ヘヲロシヤ人上陸ノ由ニ付、(松前島、松前藩主)志摩守人數差出、津輕越中守ヨリモ人數差出候由、ヲロシヤ人、此節ハ歸帆ノ由、風聞仕候、

右之儀ニ付、相州近邊ノ諸侯、其外人數差出候旨、大目付ヘ届ノ名前、左之通り

琉球國ヘ異國船渡來ノ旨、

領分ヘ異國人上陸ノ旨、

- 松平大隅守(島津齊興、鹿兒島藩主)
- 松前志摩守

相州松輪ヘ異國船貳艘來候ノ旨、

- 松平下總守

領分安房國勝山浦ニ異船貳艘見候付、人數出候旨、

- 酒井安房守(忠興、安房勝山藩主)

大島沖合ニ異國船相見候ニ付、人數差出候旨、

- 松平大和守

(船數カ)異國渡來ニ付、野比濱沖ニテ差押、警衛罷在、且又大津ヘ差出置候人數、觀音崎臺場下ヘ操出、相固候旨、

- 右 同 人

房州勝山沖ヘ異國船貳艘相見候處、浦賀邊ヘ乘入候趣、注進申來候ニ付、固人數、領分八幡浦ヘ出張申候旨、

- 阿部駿河守(正身、佐賀藩主)

領分浦々ヘ異國船相見候間、固人數差出候旨、

- 大久保加賀守(忠興、小田原藩主)

- 松平下總守

- 堀田備中守(正篤、佐倉藩主)

- 水野壹岐守(忠實、德牧藩主)

弘化三年閏五月二十八日

八二八

林(忠旭、譜西藩主) 播磨守
 森川伊豆(マ)守
 水野金五郎(忠經、山形藩主)
 水野惣兵衛(忠良、沼津藩主)
 南部信濃(利濟、盛岡藩主)守
 井上河内(正春、濱松藩主)守
 増山河内(正修、長島藩主)守
 田沼玄蕃頭(重隆、相良藩主)

但、何レモ貳番手人数差出候由、

○各藩警備ニ關スル上申書ハ、閏五月二十四日ノ條ニ、又幕府、川越・忍二藩主ニ浦賀出張及沿岸諸藩ニ警備ヲ命ズルコトハ、六月二日ノ條ニ掲ゲ、米糶ノ請ヲ斥クルハ、同五日ノ條ニ掲ゲ。

二十八日子壬 幕府、浦賀奉行一柳一太郎直方○後出羽守ヲシテ急ニ任地ニ到ラシム。

〔在府浦賀奉行書翰〕○外務省所藏本 續通信全覽所載

拙者儀、今日登城致し居候處、浦賀表へ異國船渡來ニ付、早々彼地へ罷越、貴様申合、無

幕府浦賀奉行任地ニ赴カシム

油斷取扱可申旨、於新番所前溜、伊勢守殿被仰渡候、依之明朝出立、明後朔日其表着可致候、右ニ付、御伺書其外とも、海防掛り松平河内守相頼、伊勢守殿へ可致進達候、右ニ趣、御報旁得御意候、以上、

閏五月廿八日

一柳一太郎(直方、浦賀奉行)

大久保因幡守様(忠豊)

一柳一太郎(通航一覽編輯)

〔弘化雜記〕○内閣記録 謄所藏本

弘化三年閏五月廿八日

浦賀奉行

一柳一太郎

今日被仰付、翌二十九日未明出立、○浦賀 領全覽

浦賀表に異國船相見候付、其方儀御暇被下候間、早々出立致、諸事大久保因幡守に申談、無油斷可被取計候、

(續通信全覽)

右、於新番所溜、伊勢守申渡之、列座無之、

〔續通信全覽〕○外務省 所藏本

丙午六月初日

一今朝五半時比、一柳一太郎、浦賀感應院へ到着、無程御役所へ相越、例席迄因幡守出迎、

弘化三年閏五月二十八日

八二九

於對面所、

公方様御機嫌相伺、相濟雙方對座、御用談有之、
一昨日一日ニ多水渡方相濟兼、今日迄も相渡候、

〔浦賀奉行上申書〕

○外務省所藏本
續通信全覽所載

○六月朔日幕府へ

(卷表)
一柳一太郎浦賀到着儀ニ付、申上候書付、
大久保因幡守
一柳一太郎

今朝、一太郎浦賀表へ到着仕、被仰含候趣、因幡守へ申達、奉畏候、異國船之、私共組并松平大和守・松平下總守家來申合、無油斷警衛爲仕置候處、相替儀無御座候、御備場儀、嚴重御手當申付置候、此段申上候、以上、

○浦賀及相房總沿海ノ警備ヲ嚴ニスルコトハ六月二日ニ、米艦ノ請ヲ拒絶スルコトハ同日ニ揭ゲ。

是月 外國船、松前・八戸二藩ノ海上ニ出沒ス。

〔松前藩主松前昌廣届書〕

○東京帝國大學所藏本
弘化雜記所載

弘化三丙午年六月三日、御用番青山下野守様に差出、

(忠良、老中)
私領分西蝦夷ソウヤ持場内、字ノツシヤ申崎沖合凡貳里程相隔、去月廿九日夕七時頃、船嵩凡貳千石積位、檣四本帆貳ツ宛掛候異國船壹艘、相見得、東方西北方に

外國船北方
海上ニ出沒
ス

向、颯居候段、番人共、ソウヤ勤番所に訴出候ニ付、早速見分を差立、夫々手配罷在候所、翌晦日曉ニ至、申酉に風ニ多子に方に向、追々颯去、其後帆形を相見得不申候段、勤番家來共々、今九日私居所に申達候ニ付、猶又固向等儀、嚴重ニ申付置候、此段御届申上候、以上、

閏五月九日在所日附

松前志摩守

〔八戸藩主南部信順届書〕

○弘化雜
記所載

弘化三年六月十二日夕青山様に御届

私領分奥州三戸郡鮫浦を卯辰に方白濱村を申所に、貳里程沖寅卯方に當、去月廿七日申剋、異國船壹艘相見、子丑に方に颯候様子に旨、鮫浦詰に者を申出候ニ付、早速増人數差出、其外浦々固場所には同様人數差出嚴重相備、夜中別々無油斷警衛罷在候所、翌廿八日卯申剋ニ至、子丑に方を引返、寅卯に方に颯候様子御座候得共、遠沖に義、殊に霧に多進退眩々難見定候所、同日晝頃猶子丑に方に颯去、申剋ニ至、一圓帆影も相見不申候趣申出候、勿論此上共無油斷、嚴重手當仕置候旨、在所家來共々申越候、此段御届申上候、以上、

六月十二日

南部遠江守

弘化三年閏五月是月

八三一

大日本維新史料 第一編ノ一終

昭和十三年十月二十八日印刷
昭和十三年十月三十一日發行

大日本維新史料
定價 八圓

發行者 維新史料編纂事務局



印刷者 東京市神田區美土代町十六番地 島 連 太郎

印刷所 東京市神田區美土代町十六番地 三 秀 舍

發賣所

東京市神田區錦町一丁目十六番地
株式會社 明治書院

電話 神田(25)二一四七番
振替口座東京四九九一番

